

曰佐遺跡

—曰佐遺跡群第1次調査報告—



2000
福岡市教育委員会

臼佐遺跡

—臼佐遺跡群第1次調査報告—



2000
福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの文化財が分布しています。本市では、文化財の保護、活用に努めてきていますが、都市基盤整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、南区曰佐四丁目地内に所在する曰佐遺跡群内で、共同住宅建設に先立って発掘調査を実施しました曰佐遺跡群第1次調査の報告書です。

本調査では、縄文時代と鎌倉時代の集落の遺構が検出され、多くの貴重な資料を得ることができました。

発掘調査実施にあたり費用負担などのご協力をいただきました立川圭一氏をはじめとする関係各位に感謝の意を表します。

また、本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲一郎

例　　言

1. 本書は、南区臼佐四丁目地内の開発に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が国庫補助事業（一部、受託）で発掘調査を実施した臼佐遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口謙治・城戸康利・上方高弘ほかが作成した。
3. 本書使用の遺物実測図は、山口謙治・井上加代子・山口朱美・藤祥子が作成した。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治が、遺物を平川敬治が撮影した。
5. 本書使用の図面の製図は、山口朱美が行った。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆・編集は、山口謙治が行った。
8. 本書収録の出土遺物および調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

第1章 序説

1.はじめに.....	1
2.調査の体制.....	1

第2章 遺跡の位置と環境

1.本調査報告遺跡の位置.....	2
2.本報告周辺遺跡の概要.....	3

第3章 調査の記録

1.調査の概要.....	5
2.中世の遺構と出土遺物.....	7
3.包含層と出土遺物.....	16

第4章 まとめ.....	48
--------------	----

挿図目次

Fig. 1 口佐遺跡群の位置と周辺の遺跡.....	3
Fig. 2 地形実測図.....	4
Fig. 3 遺構配置実測図.....	6
Fig. 4 第5号土壤（SK-05）実測図.....	7
Fig. 5 第5号土壤出土遺物実測図.....	8
Fig. 6 第1号土坑（SK-01）実測図.....	10
Fig. 7 第2号溝（SD-02）土層断面実測図.....	11
Fig. 8 第7号土壤（SK-07）実測図.....	11
Fig. 9 中世遺構等出土遺物実測図.....	12
Fig. 10 第3号溝（SD-03）断面実測図.....	13
Fig. 11 第14号土坑（SK-14）実測図.....	13
Fig. 12 第17号掘立柱建物（SB-17）実測図.....	15
Fig. 13 包含層調査区割付実測図.....	16
Fig. 14 土層柱状実測図.....	17
Fig. 15 出土細石刃核実測図.....	19
Fig. 16 出土繩文土器実測図（1）.....	19
Fig. 17 出土繩文土器実測図（2）.....	21

Fig.18	出土縄文土器実測図（3）	23
Fig.19	出土縄文土器実測図（4）	24
Fig.20	出土縄文土器実測図（5）	26
Fig.21	出土突帯文土器実測図（1）	28
Fig.22	出土突帯文土器実測図（2）	30
Fig.23	出土突帯文土器実測図（3）	32
Fig.24	出土突帯文土器実測図（4）	34
Fig.25	出土石製穂摘み具および石斧実測図	37
Fig.26	出土土製品および石皿等実測図	38
Fig.27	出土石礫実測図	39
Fig.28	出土剥片石器実測図（1）	41
Fig.29	出土剥片石器実測図（2）	43
Fig.30	出土剥片実測図	45
Fig.31	出土石核実測図	47
付図	出土遺物分布状況および調査区南壁土層断面実測図	

図 版 目 次

Ph.1	調査地より油山山系をのぞむ	2
Ph.2	第5号土壌と出土遺物	9
Ph.3	中世遺構検出状況および出土遺物	14
Ph.4	土層堆積状況	18
Ph.5	出土細石刃核	19
Ph.6	出土縄文土器（1）	20
Ph.7	出土縄文土器（2）	22
Ph.8	出土縄文土器（3）	25
Ph.9	出土突帯文土器（1）	29
Ph.10	出土突帯文土器（2）	31
Ph.11	出土突帯文土器（3）	33
Ph.12	出土突帯文土器（4）	35
Ph.13	出土石製品および十錘	36
Ph.14	出土石礫	40
Ph.15	出土剥片石器（1）	42
Ph.16	出土剥片石器（2）	44
Ph.17	出土剥片	46

第1章 序説

1. はじめに

南区曰佐四丁目地内に、地権者である立川圭一氏による共同住宅建設が計画され、昭和60年に立川圭一・立川孝子氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）に、埋蔵文化財事前審査願書が提出された。この申請地は、周辺一帯の調査事例はないものの古代から中世にかけての遺物が採集されており、周知の遺跡である曰佐遺跡群に含まれている。以上から埋文課は、遺構の遺存状態を把握するための試掘調査が必要であると決定し、昭和60年12月9日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、表土下20cm前後の耕作土と、15~40cmの粘土混じり黄褐色砂を除去した粘土混じり黄褐色砂～シルトの面で、上坑・溝・柱穴を検出した。これらの遺構は、申請地の西側のみ分布し、少量の白磁と土師器が出土した。以上から申請地の西側半分については、表土下35~60cmに古代末から中世にかけての集落が遺存していると予想した。共同住宅建設計画の申請地は、周知の遺跡である曰佐遺跡群に含まれていること、試掘調査結果から、埋文課は共同住宅建設の計画変更による保存が必要であると決定した。

以上の決定を受け、申請者と埋文課は協議を重ねたが現状での保存は困難であり、遺跡が遺存している西側半分について記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査にあたって、立川氏は個人による事業であるが、共同住宅建設であるため申請者との調査費、調査期間、出土遺物の取り扱いなど協議を重ね、調査費用の一部を立川氏に負担していただくことで契約事項が整い、調査契約が成立し、調査事務所など附帯条件が整ったあと、本調査を実施した。

調査名	曰佐遺跡群第1次調査	遺跡調査番号	8638
調査地地籍	南区曰佐四丁目17番30号	分布地図番号	40-0100 遺跡略号 OSS-1
調査期間	1986年9月5日~同年11月10日	開発面積	2,176m ² 調査実施面積 871.2m ²

2. 調査の体制

調査の体制としては、以下に示す体制を構成した。緊急調査であるため充分なる体制は組むことができなかったが、発掘調査委託者である立川圭一氏をはじめとする関係者各位の協力のもとに、発掘調査は順調に進行いたしました。関係各位に謝意を表します。

調査主体	福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎(前) 西瀬一郎
調査総括	埋蔵文化財課長 柳田純孝(前) 山崎純男
	第2係長 畠高憲雄(前) 調査第2係長 丸武卓治
試掘調査担当	山崎純男・杉山富雄
調査担当	山口譲治
事務担当	松延好文(前) 谷口真山美(文化財整備課管理係)
調査協力者	城戸康利・上方高弘・李弘鍾・野村俊之・石田晴美・尾崎君枝・甲斐田嘉子・坂井昭美・松本幸子・山崎美枝子
整理協力者	犬丸陽子・井上加代子・平川敬治・山口朱美・藤祥子・植木香織・内川美樹

第2章 遺跡の位置と環境

1. 本調査報告遺跡の位置 (Fig. 1・2)

福岡平野のほぼ中央部には、北流し、博多湾に注ぐ那珂川（中流域で諸岡川合流）・御笠川があり、両河川間の中流域から下流域にかけては、春日丘陵から延びる中位あるいは低位の段丘が形成されている。この中位・低位段丘は著しく開析され、南東から北西方向に断続的に延び徐々に低くなる高まりがあり、これらの段丘状には、南から須玖遺跡群・弥永遺跡・南八幡遺跡群・井尻B遺跡群・諸岡遺跡群・五十川遺跡群・板付遺跡・那珂遺跡群・比恵遺跡群などが所在しており、その北には砂丘が発達し、博多遺跡群が所在している。いずれも弥生時代から中世にかけての拠点的性格をもつ大遺跡で、弥生時代以降、福岡平野のなかで中心的役割を担ってきた地域であるといえよう。現在、この地域は、福岡市・春日市・大野城市と三市にまたがっているが、都市基盤整備が整い、JR鹿児島本線・南福岡線・西鉄大牟田線、国道・県道など主要道路が縱横に走り、宅地化が進み博多市街地と一体化しており、標高20m～5m前後の緩やかな傾斜はもつものの、ほぼ平坦な地形となっている。

曰佐遺跡群は、那珂川中流域の東岸で、同河川と標高60m～15m前後の春日丘陵間の低位段丘（自然堤防）上の標高15m～12m前後に所在している。

本調査地は、曰佐遺跡群のほぼ中央部にあたり、本調査実施までは牧場として使用されていた。本調査地は、国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から28.6cm、東から11.2cmにあたる。



Ph. 1 調査地より油山山系をのぞむ

2. 本報告周辺遺跡の概要 (Fig. 1)

曰佐遺跡群内においては、本調査地南側隣接地が第2次調査として本年度実施され、地表下60cm前後で、古代末から中世の土坑・溝・柱穴からなる集落を検出した。

本調査地の北北西1.5km前後には井尻B遺跡群が所在し、井尻B遺跡群は現在、14ヶ所の調査が実施されている。先土器時代細石刃文化期の包含層、弥生時代後期後半から古墳時代の聚穴式住居など



Fig. 1 曰佐遺跡群の位置と周辺の遺跡

からなる集落、前方後円墳、古代の井尻廃寺などからなる集落が検出されている。

本調査地の西1.2kmには、野多目C遺跡群が所在し、4ヶ所の調査が実施され、縄文時代後期の貯蔵穴群や弥生時代中期・古墳時代・奈良時代の集落が検出されている。また、北北西1.2kmには野多目A遺跡群が所在し、4ヶ所の調査が実施され、縄文時代終末期の突帯文土器期の水田、古墳時代・古代・中世の集落が検出されている。

本調査地の南1km弱には弥永遺跡が所在し、3ヶ所の調査が実施され、弥生時代後期の環溝集落や墓地が検出されている。また、南南西1.2km前後には警弥郷B遺跡が所在し、3ヶ所の調査が実施され、弥生時代後期から中世の集落が検出されている。

奴国の王墓が所在する須玖岡本遺跡は、本調査地の東南東1.5km前後にあたり、4世紀末前後の福岡平野の首長墓である老司古墳は南西1.5km前後にあたる。本調査出土の突帯文土器に視点をあてると、同時期の集落・包含層が検出されている諸岡遺跡は、本調査地の北東2.3km前後、板付遺跡は北東3km、那珂遺跡は北3.4km前後に所在している。

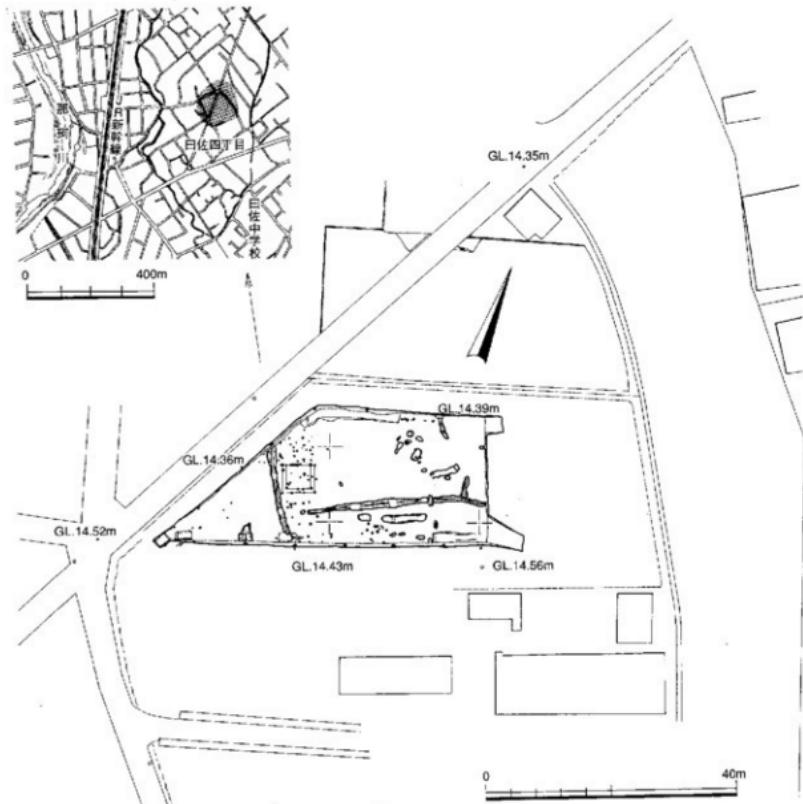


Fig. 2 地形実測図

第3章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig. 2・3・13, Ph. 1)

共同住宅建設予定地（以下、申請地とする）は、北側は外柵を、東側は外柵・里道を挟んでそれぞれ民有地と隣接し、西側は南南西から北北東に走る幅4m強の道路に接し、南側は地権者の宅地および牧草地となっており、平面形は北側が狭い台形を呈している。本調査は、委託者と縄文課との協議の過程で、申請地の西側半分に遺構が分布するとして、申請地西側半分を調査対象としており、廃土および調査事務所設置は申請地内で処理を行うこととなっていた。本調査は、まず調査対象地の北側に調査事務所兼休憩所と仮設トイレの用地として4m強を確保し、西側道路との境には外柵が設置されていたので、4m前後の引きをとり、南側は委託者の土地ではあるが、本調査地が沖積微高上に所在しており、下部遺構の存在も予想できたため2m前後の引きをとり、調査区を設定した。

本調査は、まずバックホーを使用して、20cm前後の黒褐色砂質土（耕作土）、15~40cmの暗褐色砂質土・暗黃褐色砂質土・黃褐色シルトを除去することから始めた。その結果、標高13.87~13.44m前後の暗黃褐色砂～粘土混じり黃褐色シルト～粘土の上面で、遺構が検出できたので精査した。また、この遺構検出面は東から西方方向へやや傾斜している。さらに、第2号溝検出時に、茅葺層である粘土混じり黃褐色シルト中に突帯文土器などの縄文土器や炭化物が含まれていることがわかったので、遺構面（中世面）精査終了後、下部包含層の調査を実施した。

中世面検出遺構としては、土壙2基、土坑6基、溝および溝状遺構6条と掘立柱建物1棟と柱穴がある。検出遺構は出土遺物から古代から中世にかけてのものであるが、遺構分布状態は散漫である。これらの検出遺構は掘立柱建物をS B、土壙（墓）・土坑をS K、溝（溝状遺構を含む）をSD、柱穴をS Pと遺構記号を使用し、遺構検出順に遺構記号の後に2桁の通し番号を付した〔例：SK-01（土坑）・SD-02（溝）・SK-05（土壙）・SD-06（溝状遺構）・SB-17（掘立柱建物）〕。なお、柱穴については検出順に遺構記号SPの後に3桁の通し番号を付し、建物として確認したものは整理作業過程で、遺構番号の後に2桁の通し番号を付した（例：SB-1701）。本書のなかでは遺構名・遺構記号を併記して使用している。また、中世面下の突帯文土器は、出土分布状態および上層断面観察から溝状をなす遺構から出土していると考えられるが、平面的にラインを確認できなかつたため包含層として扱った。

出土遺物として、先土器時代の細石刃核、縄文時代の前・中・後・晚期の縄文土器・突帯文土器・土製品・石器、古代の土師器、中世の白磁・青磁・土師器・鉄器・石鍋などがある。下部包含層から出土した細石刃核、縄文時代前・中・後期前半の縄文土器や剥片礫などの石器はローリングを受け摩耗している。なお、縄文時代後期後半の縄文土器、同時代終末期の突帯文土器・石器は、ローリングを受け摩耗したものもあるが、大半は傷みが少ない。古代から中世にかけての上師器・白磁・青磁・鉄器・石鍋などの遺物は、中世面の土壙・溝などの各遺構と遺構検出時に出土したものである。これらの出土遺物は、岡化したもの・写真撮影したものについては、頭に8638の調査登録番号を冠し、土器・上製品は00001から、鉄器は00501から、石器は01001からそれぞれ通し番号を付し登録番号とした。なお、本書のなかでは、挿図および図版は調査登録番号を外した5桁で示し、本文中では2桁・4桁で述べていくことにする。また、未岡化・未撮影の遺物の中世面出土遺物は、出土遺構ごとに検出時出土遺物として、下部包含層出土遺物の土器はグリットごとに、石製品は一括し、岡化・撮影遺物の後の通し番号を付し登録番号とした。

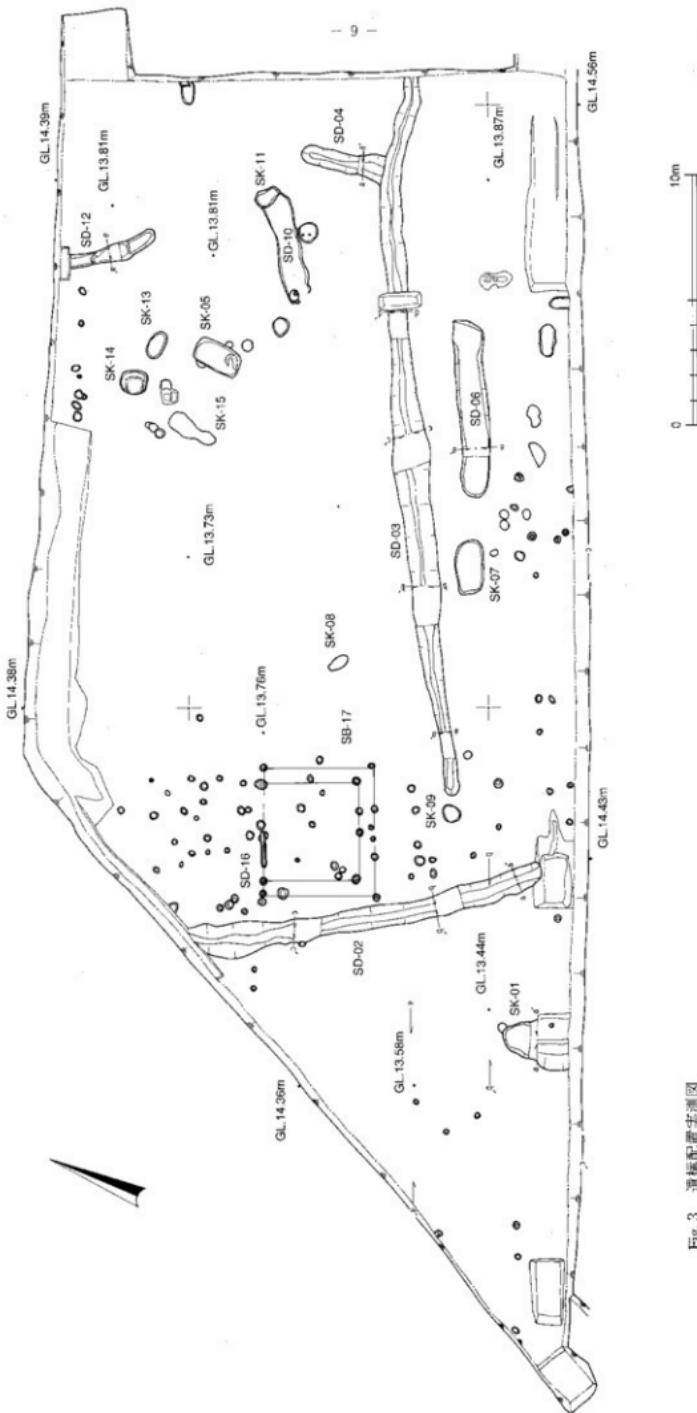


Fig. 3 调标配置图

2. 中世の遺構と出土遺物 (Fig. 3, Ph. 3)

(1) 第5号土壙 (SK-05) と出土遺物 (Fig. 4・5, Ph. 2)

本土壙は、調査区北側の中央から東寄りで、基盤層中に拳大の角礫の集石があり、暗褐色土を覆土とする隅丸長方形を呈する土坑として検出した。集石は土坑の中央部から北にかけての1m前後、幅40cm前後、厚さ15cm前後あり、その下に長さ5cm～20cmの木炭を土坑一杯に敷き詰めており、その下は炭化物を含む茶灰色シルトが覆い、その下は木口状をなす茶灰色シルトが南北にあり、それを固定する形で明茶灰色シルト、淡黄灰色シルト、黒灰色土を含む黃灰色シルト、黃灰色シルトが締まつた状態で詰まっている。土坑を掘り、櫓を組み、火葬した後、木炭を敷き詰め、北側に副葬遺物を置き、火葬骨を集石で封じ込めた土壙墓と考えられる。なお、木炭上からは少量の骨片が出上し、副葬

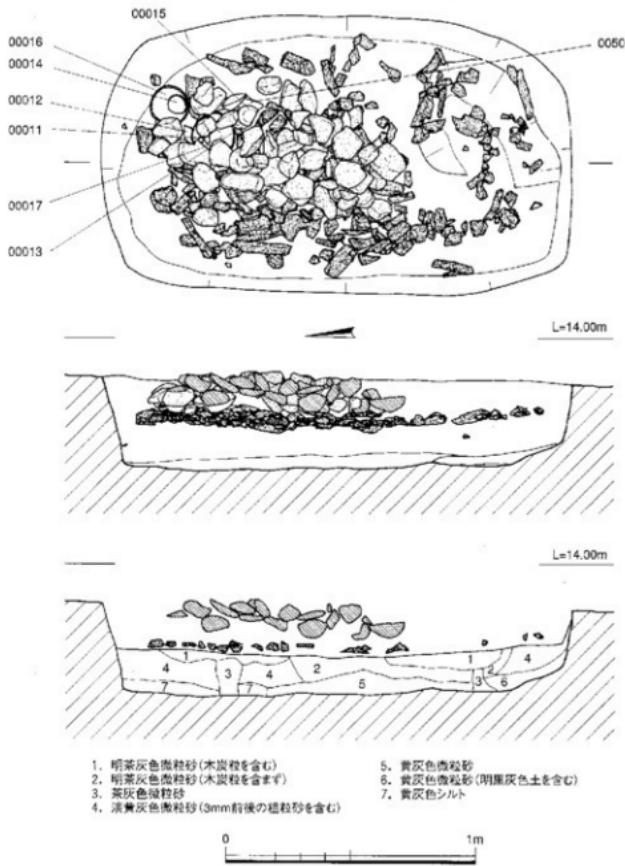


Fig. 4 第5号土壙 (SK-05) 実測図

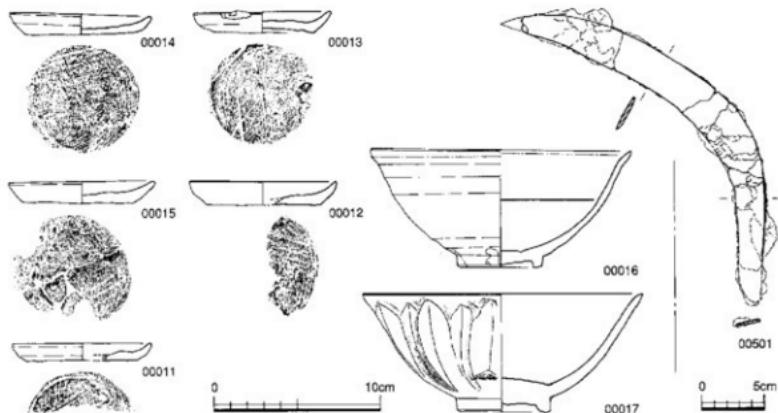


Fig. 5 第5号土壙出土遺物実測図

遺物・集石は少し火を受けている。土壙の底はほぼ平坦で、不整圓丸方形を呈し、長軸175cm、短軸97cmを測り、壁はやや開きぎみに25~35cm立ち上がり、検出面では、長軸188cm、短軸110cmを測る。

出土遺物としては、白磁・青磁・鉄器各1点、土師器皿5点の副葬遺物のほか、11点の土師器皿破片と鉄釘1点がある。16は白磁碗で、やや青みを帯びた白色の釉が器面を覆い、蓋付まで一部釉が流れている。釉は水波は見られずピンホールが数ヶ所みられる。胎土は白色で、精良。高台の一部が欠損しているのみで、口径15.5cm、器高7.1cm、高台径5.1cmを測る。17は、外面に籀連弁文が施された竜泉窯系青磁碗で、蓋付と内底は露胎のままであるが、器面は灰緑色の透明釉がかかり、胎土は細砂粒を少し含み灰白色を呈している。完形で、口径16.8cm、器高7cm、高台径5.6cmを測る。11~15は糸切り底の土師器皿で、外底には板状圧痕がみられる。器面は回転ナデで仕上げ、胎土には細砂粒と赤色粒を含み堅密で、焼成は良く、橙色から浅黄橙色を呈している。13・14は完形、15はほぼ完形で、口径8.2cm・8.4cm・8.8cm、底径6cm・6.6cm・6.6cm、器高1.4cmを測る。11は口径8.3cm、底径6.4cm、器高1cm。12は口径8.8cm、底径6.9cm、器高1.4cm。00501は鉄鎌で、器長22.8cm、刃渡り長23cm前後、刃部最大長3.3cm、刃部最大厚0.4cm、柄部長11.4cm、柄部最大幅2.5cm、柄部最大厚0.2cmを測る。

以上から、本土壙墓は本土壙上で火葬し、副葬遺物とともに埋葬した火葬墓で、副葬遺物から12世紀中頃前後のものといえよう。

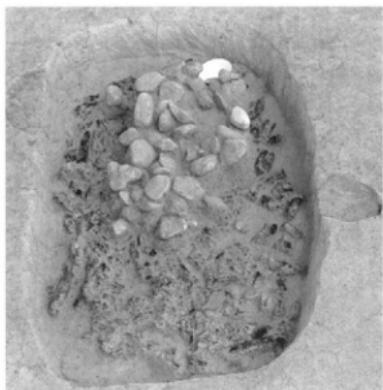
(2) その他の造構と出土遺物 (Fig. 6 ~ 12, Ph. 3)

第1号土坑 (SK-01)

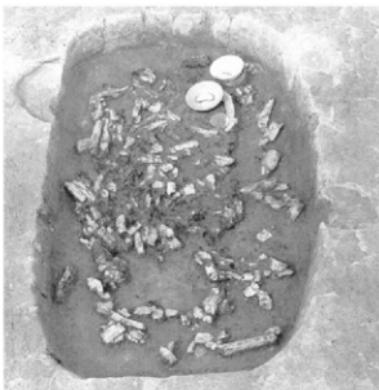
本土坑は調査区の西側に位置し、上から明茶褐色土(砂)・暗茶褐色砂・暗茶褐色砂シルト・暗茶色砂・灰色砂混じり明茶色砂を覆土としている。検出面では、南側は調査区外へ延び、一部は試掘調査で破壊されているが、平面形椭円形を呈すると考えられる。確認長軸2.6m、短軸1.8mを測り、床は横断面形はほぼ平坦であるが、北から南へ傾斜をもち、壁は大きく開きながら立ち上がり、18~45cm遺存している。溝状をなす土坑か。本土坑からは、少量の土師器細片が出土した。

第2号溝 (SD-02)

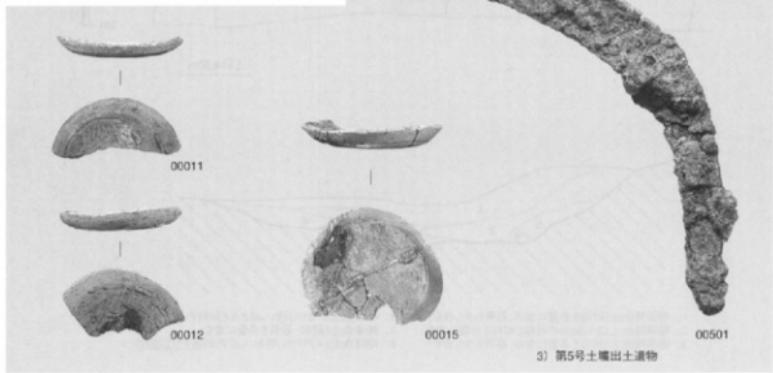
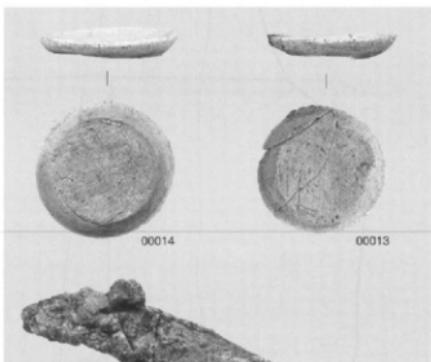
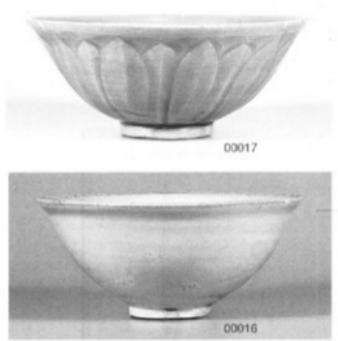
本溝は調査区の西側を南北に走る形で検出し、上から黄色シルトブロックを含む明灰色土・灰色



1) 第5号土壤木炭・石出土状況（南から）



2) 第5号土壤遺物出土状況（南から）



3) 第5号土櫛出土遺物

Ph. 2 第5号土壤と出土遺物

上・炭化物を含む暗灰色土・暗灰色土～シルト・暗灰色土・灰色砂を埋土としている。横断面は逆台形を呈し、部分的ではあるが溝底に拳大の花崗岩角礫等を敷き詰めている。底は凹凸があるものの横断面形逆台形を呈し、検出面の幅は0.7m～1.4mを測り、25cm～40cm遺存している。N-31.5°-Wの主軸方位をとっている。



- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1. 明茶褐色土(砂粒を多量に含み、石英も少し含む) | 4. 明茶色土(1よりは暗い、ほとんど砂粒のみ) |
| 2. 魔茶褐色土(2～5mmの石粒と砂粒を多量に含む) | 5. 暗茶褐色土(砂粒・石英を多量に含む) |
| 3. 魔茶褐色土(砂粒を多量に含み、石英も少し含む) | 6. 明茶色土(4より少し明るい、灰色砂粒を少し含む) |

Fig. 6 第1号土坑 (SK-01) 実測図

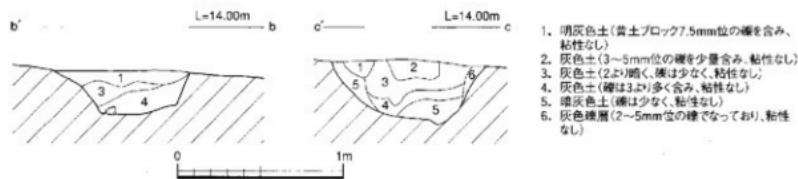


Fig. 7 第2号溝 (SD-02) 土層断面実測図

出土遺物としては、白磁や土師器の細片が少量あるほか、滑石製石鍋片（1080・1081）がある。10は白磁碗で、削り出しの高台をもち、外面は露胎のままであるが、内面には淡灰色の透明釉が施されている。胎土には黒色粒と細砂粒を少し含み灰白色を呈し、高台径6.7cmを測る。

出土遺物から本溝は11世紀後半前後のものか。

第3号溝 (SD-03)・第4号溝 (SD-04)

本溝は、調査区中央からやや南寄りで東西に走る形で検出し、上から炭化物を含む明茶褐色～黒褐色砂～シルト・黄褐色砂・茶灰色粗砂・暗茶褐色砂・黄褐色シルト混じり黒褐色土～シルト～砂を埋

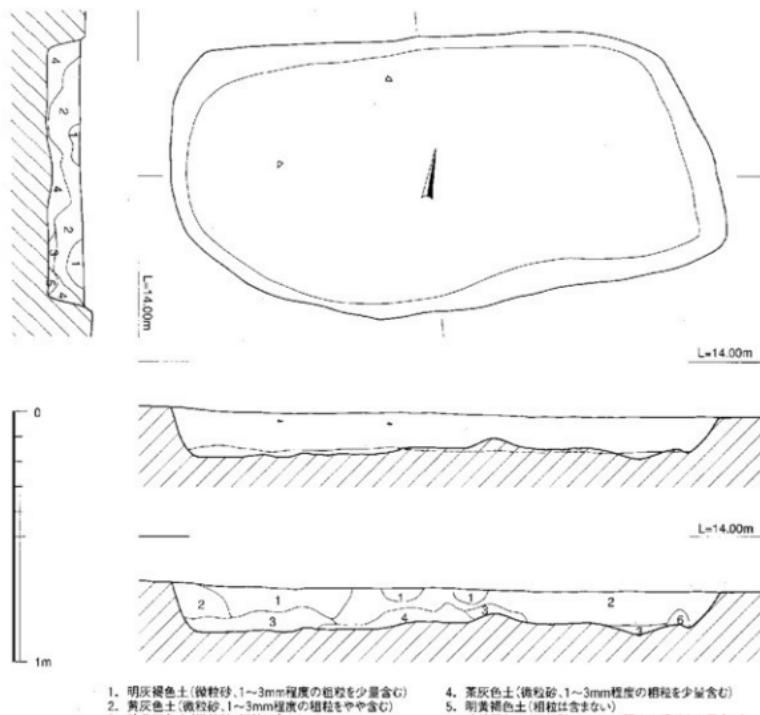


Fig. 8 第7号土塚 (SK-07) 実測図

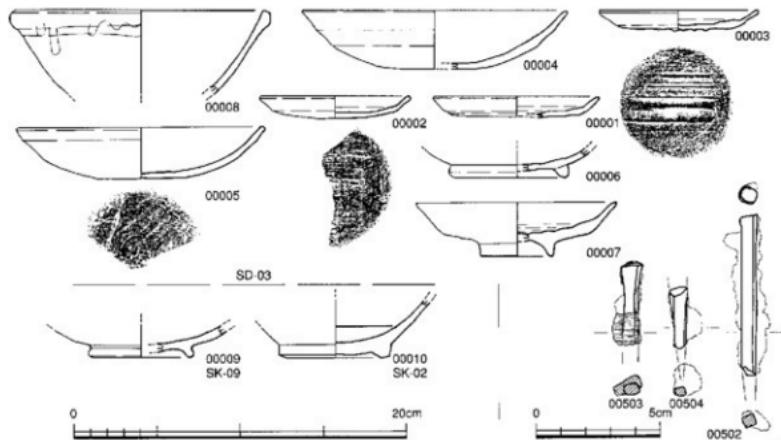


Fig. 9 中間遺構等出土遺物実測図

土としている。第4号溝は、調査区東南部で第3号溝から派生し、北に延びる形で検出し、上から暗茶灰色砂・淡灰色粗砂・淡茶灰色土・明黒灰色シルトを埋土としている。第3号溝・第4号溝は、切り合い関係がないことから一連の溝と考えられる。底は凹凸があり、一様でないが横断面は逆台形からU字をなし、検出面では0.5m～1.5mを測り、10cm～25cm前後遺存している。第3号溝はN-64.5°-E、第4号溝はN-10°-Wの主軸方位をとっている。

本溝からは、白磁・土師器が少量出土した。08は玉縁状口縁をもつ白磁碗で、器面には灰色の透明釉が施されている。施釉には細かい氷裂が入り、外側にはビンホールがみられる。胎土には、細砂粒・黒色粒を含み淡黄色を呈している。1／4ほど口縁が遺存しており、口径15cmを測る。01～03は土師器皿で、外底に板状圧痕が残り器表面から内面にかけては回転ナデ、内底はナデで仕上げている。01は胎土に細砂粒・赤色粒を含み堅緻で焼成も良く、器面は黄橙色を呈する。口径10cm、底径8cm、器高1.2cm。02は胎土に粗砂粒・細砂粒を少量含み堅緻で、焼成も良く、器面は淡黄橙色を呈する。口径9.2cm、器高1.4cm。03は胎土に砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は淡黄橙色を呈する。完形で、口径9.6cm、器高1.2cmを測る。04・05は無高台の土師器壺である。04は器面は摩耗しているが、回転ナデで仕上げられているか。胎土には粗砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は淡橙色を呈する。口径16cm、器高3.5cm。05は外底に板状圧痕がみられ、器面は回転ナデで仕上げられているか。胎土には粗砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は淡橙色を呈する。06・07是有高台の土師器壺である。06は器面はナデで仕上げられている。胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成もよく、浅黄橙色を呈し、底径7.2cmを測る。07は器面は摩耗している。胎土には粗砂・細砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は浅黄橙色を呈する。口径12cm、底径4.4cm、器高3.2cm。

以上、出土遺物から本溝は11世紀のものといえ、第2号溝と直交する形で所在していることから一連の遺構の可能性が高く、屋敷を囲む区画溝か。

第6号溝状遺構（SD-006）

本溝は、調査区南側の第3号溝に並行する形で検出し、上から淡茶灰色砂～シルト・淡黄灰色シルト・黒灰色～黄灰色シルト～砂を埋土としている。底は凹凸があるもののほぼ平坦で、壁はやや開き

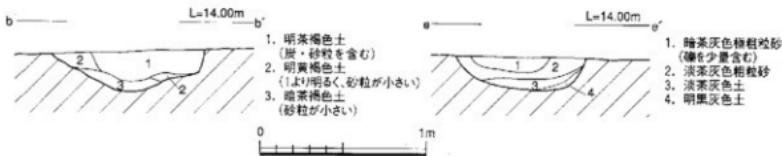


Fig.10 第3号溝 (SD-03) 断面実測図

ぎみに立ち上がり、検出面では、幅1.2m前後、長さ7m弱を測り、20cm前後遺存している。本溝は、半平面隅丸長方形を呈しており、溝状土坑とすべきか。出土遺物としては、土師器細片が数点出土した。

第7号土壙 (SK-07)

本土壙は、調査区の南側中央で検出した。上から明灰褐色砂～シルト・黄灰色砂～シルト・暗灰褐色シルト・茶灰色砂シルト・黄褐色シルト・暗茶灰色シルトを埋土とし、20cm弱遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開きぎみに立ち上がり、検出面では長軸2.2m弱、短軸1.1m前後を測る隅丸長方形を呈している。本土壙からは、数点の土師器坏細片などの遺物が出土した。形状は第5号土壙に近似しているが、炭化物も少ない。墓か。

第8号土坑 (SK-08)

本土坑は、調査区中央部の西寄りで検出し、明茶褐色シルト・暗褐色砂～シルト・黒褐色シルトを埋土とし、20cm弱遺存している。床面は皿状をなし、壁はやや開きぎみに立ち上がり、検出面では長軸80cm、短軸40cmを測る。

第9号土坑 (SK-09)

本土坑は、調査区西南部の第3号溝西端の延長部で第2号溝との間に位置し、茶褐色～暗褐色の砂・シルトが互層状態で埋土となり20cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、やや開きぎみに立ち上がり、検出面では65cm前後の不整円形を呈している。本土坑からは、数点の土師器細片が出土した。09は、内黒の黒色土器の高台付挽、胎上には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器表面は浅黄褐色を呈している。

第14号土坑 (SK-14)

本土坑は、調査区北側中央部のやや東寄りで、第5・13・15号土坑と4基、方形をなす配置で検出し、明黄灰色砂・明黄灰色～明黄茶灰色砂～シルト・青灰色シルト～砂を埋土とし、20cm弱遺存している。床面はほぼ平坦で、開きぎみに立ち上がり、傾斜を持つ段となり、立ち上がり、検出面では長軸1.1m弱、短軸0.9m強の隅丸方形を呈している。第13号土坑は、長軸1.1m、

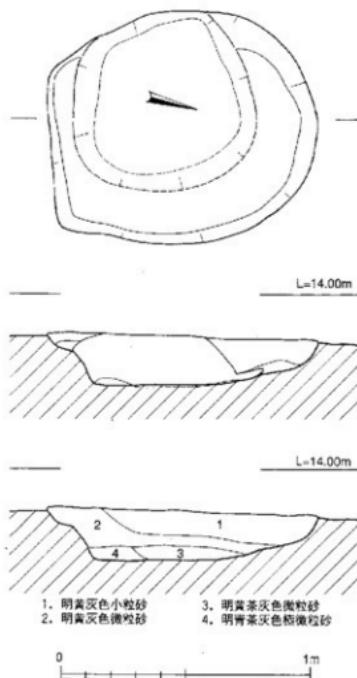
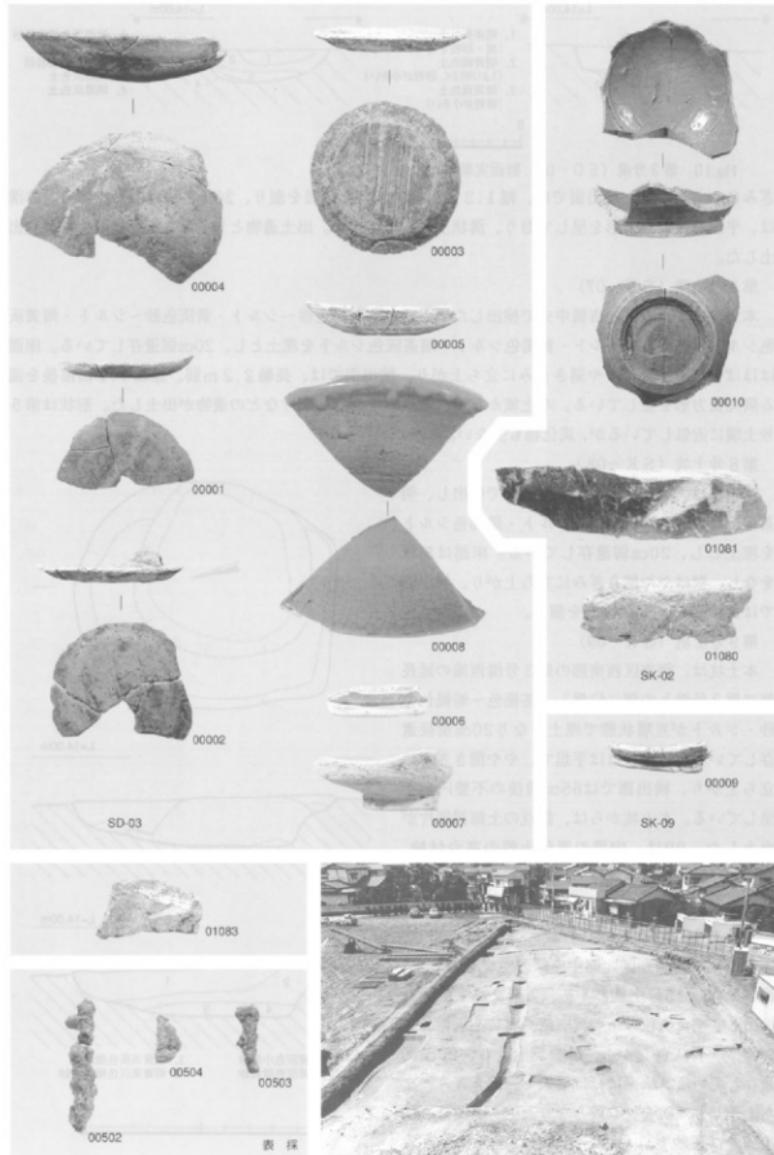


Fig.11 第14号土坑 (SK-14) 実測図



Ph. 3 中世遺構検出状況および出土遺物

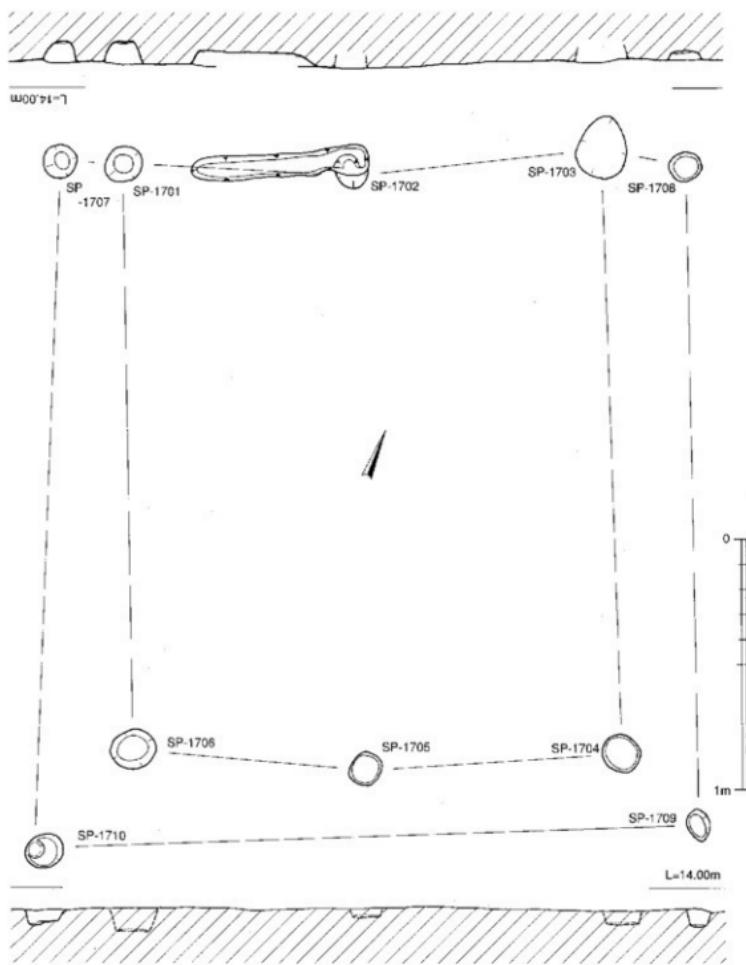


Fig.12 第17号掘立柱建物（SB-17）実測図

短軸0.6mを測る隅丸長方形を呈し、第15号土坑は、長軸1m前後、短軸0.7mを測る隅丸長方形を呈し、いずれも20cm前後遺存している。

第17号掘立柱建物（SB-17）

本建物は、調査区中央西側部の第2号溝の東側で1701～1710号柱穴の10個の柱穴を確認し、建物として認定した。四角の主柱穴は20cm前後遺存しているが、中間は10cm弱遺存しているところから、 2×2 間の三面廂の建物で、桁行きの柱が削平より消滅したと考えられる。N-23°-Wの主軸方位をとる。

3. 包含層と出土遺物

(1) 調査区設定および土層について (Fig. 13・14, 付図, Ph. 4)

中世面の遺構検出作業および第1号土坑や第2号溝の精査において、突帯文土器などの縄文土器が出土し、中世面下に包含層が存在することがわかり、中世面終了後、下部包含層の調査を実施した。調査は、中世面詳細図作成用に設定した6m方眼を利用して、西から東へ、A～Iの9分割、北から南

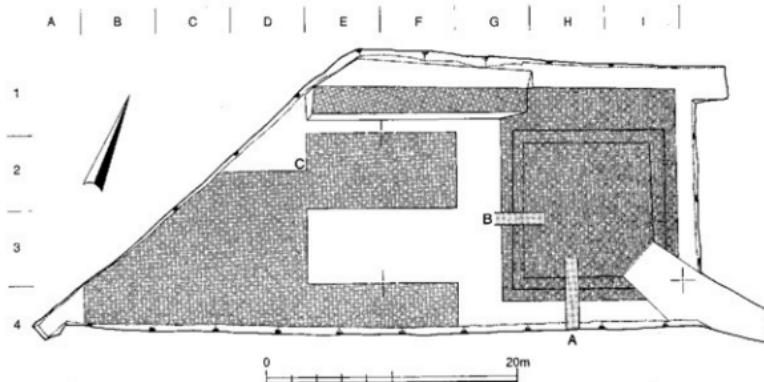


Fig. 13 包含層調査区割付実測図

へ4分割し、A1～I3区画を設定した。まず、下部包含層が確認できた調査区西側のB3・B4区、C2～C4区、D2～D4区を調査対象とし、土層観察用の土壁を区境に残して着手した。その結果、突帯文土器は帶状をなし、溝中の出土状況の様相を呈したため、E・F2区を精査対象とするとともに、A～G1区とE・F4区の調査溝を設定した。また、包含層の抜がりおよび土層堆積状況を確認するため、中世面調査区東側部に14m方眼の調査区を設定した。

下部包含層調査区の土層は、堆積状態により、V～X層群の5層群に大別できる。V層群は、調査区南壁ではD4・E4区にまたがり、上場幅11.3m前後、深さ1.6m前後、底幅5.4m前後の溝状をなし、39枚の堆積層で構成されている。明黄褐色粘土・シルト・砂、暗黄褐色粘土・粗砂、茶褐色～暗茶褐色砂、黃灰色砂、茶灰色～暗茶灰色粘土・シルト・砂、綠灰色～暗綠灰色シルト・砂、灰褐色シルト・砂、灰色砂・粗砂、青灰色シルト、黒褐色粗砂の互層でV層群は構成され、突帯文土器など縄文土器を包含している。VI層群は、V層群に切られた形で溝状をなし、E4～F4区に深まりをもち、16枚の堆積層で構成されている。黒褐色～暗茶褐色粘土・シルト・砂、茶褐色砂、黃褐色粘土・シルト・砂、青灰色砂などで構成され、突帯文土器などの縄文土器を包含している。VII層群は、C4・D4区に深まりをもち、V層群に切られ、51枚の堆積層で構成されている。黄褐色粘土・シルト・砂、粗砂、茶褐色～暗茶褐色シルト・砂、青灰色粘土・シルト・砂、赤褐色砂・粗砂、茶灰色～灰色シルト・砂・粗砂、黒褐色砂・粗砂、細繭などの互層で構成され、突帯文土器など縄文土器を包含している。

VIII層群から以下については、VII層群までの様相となり、水平堆積層をなしている。VIII層群は、X層群を切る形で、D4から以東にあり、V～VII層群に切られている。VIII層群の上部は、VII層群と同様、茶褐色・黃褐色・赤褐色の砂・粗砂で構成され、下部は比較的厚みをもち、締まった砂・粗砂・砂礫で構成された順層堆積となり、縄文時代後期の縄文土器を包含している。X層群はC4区から西に

分布し、Ⅶ層群に切られている。ほとんどが水平の順層堆積をしており、上から黄褐色粘土、黒褐色粘土、黄褐色粗砂、砂礫・砂の互層を挟み粗砂、灰色砂となっており、上部は縄文土器を包含するが摩耗している。Ⅷ層群とX層群は同一層群の可能性がある。IX層群は、青灰色粘土、黒褐色粘土、青灰色砂、青灰色粗砂が順層堆積している。地表下3m前後で湧水のため、確認作業を断念した。東側調査区でみると、地表下3m以上は、3cm立方前後の石英礫を含む花崗岩円礫からなる砂礫層、暗灰色粗砂層、砂礫層、茶褐色～暗灰色粘土、石英や花崗岩円礫・角礫を含む疊層となっている。

V～VII層群は、縄文時代終末期の突帯文土器単純期の溝状をなすと考えられるが、平面観察で上場のラインがつかめず溝と認定できなかった。突帯文土器単純期の包含層。

Ⅷ層群の下部は、縄文時代後期の包含層。

X層群は、縄文時代の縄文土器を包含するが、いずれもローリングを受け摩耗している。

IX層群からは、細石刃核が出土しているが、ローリングを受け摩耗している。

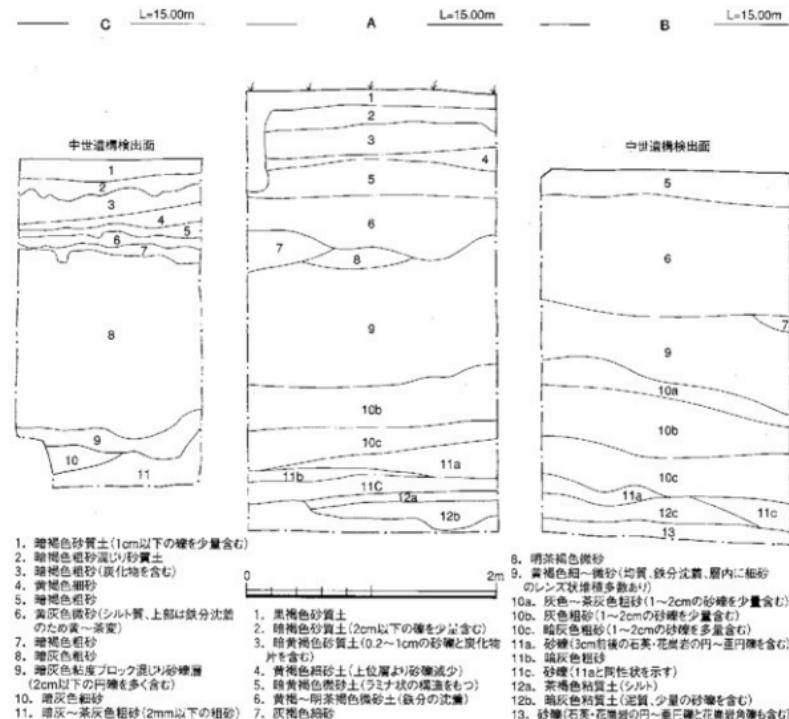


Fig.14 土層柱状実測図



1) 調査区南壁通し断面



4) 3G区土層断面



2) 3B+C区土層断面（北から）



5) 4G~I区土層断面



3) 2E区土層断面

Ph. 4 土層堆積状況

(2) 先土器時代遺物 (Fig.15, Ph.5)

本調査においては、東側調査区で下部包含層（以下、包含層とする）のⅤ層群に相当する層から細石刃核1点が出土した。このほか、包含層のV～Ⅷ・X層群から先土器時代の可能性がある剥片が出土しているが、先土器時代遺物であると確定できないので、同時代遺物として認定しなかった。

1012は漆黒の黒曜石円錐を素材とし、円錐を半削し、半削面を艦板とし、打面調整加工を施し、幅4mm前後、長さ2.5mm前後の細石刃を連続剥出し、7枚の剥出面が残っている。剥出面と打面の角度はほぼ90°である。艦板には、打面調整加工痕が残り、裏面には自然面が残っている。器面はローリングを受け、やや摩耗している。先土器時代終末期の細石刃文化期のもので、土器が共伴しない細石刃文化期古段階のものといえる。

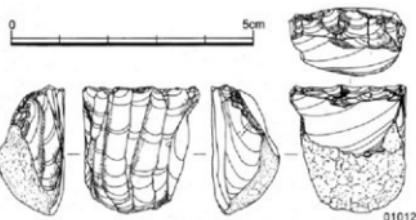
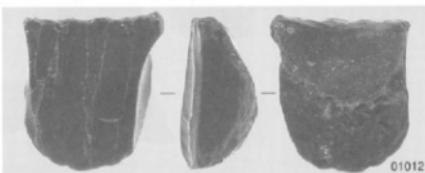


Fig.15 出土細石刃核実測図



Ph.5 出土細石刃核

(3) 繩文土器 (Fig.16～20, Ph.6～8)

本調査では、包含層のV～Ⅸ・X層群から多くの縄文土器が出土した。V・Ⅸ層群とⅨ層群の上部から出土した縄文時代終末期の突帯文土器と、Ⅸ層群下部から出土した縄文時代後期の一部の縄文土器を除く縄文土器は、ローリングを受け摩耗している。ここでは、突帯文土器以外の縄文土器についてみていくことにする。

0101は東側調査区のⅨ層群下部相当層から出土したもので、山形押型文に似る沈線を器面に施しており、胎土には砂粒を含み堅緻で、黄橙色を呈する。胴下半部片か。0183は器表面に沈線文がみられ、胎土には滑石を多く含み、焼成も良く、器面は赤褐色を呈しているがローリングを受け、摩耗している。0186は器表面に竹管状工具による列点文を指頭痕のまわりに渦状に施し、口唇にも刻み目を入れている。胎土には滑石を多く含み、焼成も良く、器面は褐灰色を呈しているが摩耗している。0178は口縁に指頭文を施し、胎土には滑石を含み焼成も良く、器面は橙色を呈している。0185は器面に沈線文が施され、胎土には繊粒砂を含み堅緻で、器面は褐色を呈するが摩耗している。0101は前期の曾畠式土器、0186は中期の並木式土器、0178・0183・0185は中期後半から後期前半にかけての阿高式系土器。(Fig.16, Ph.6)

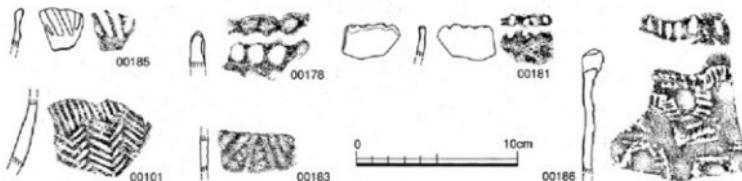
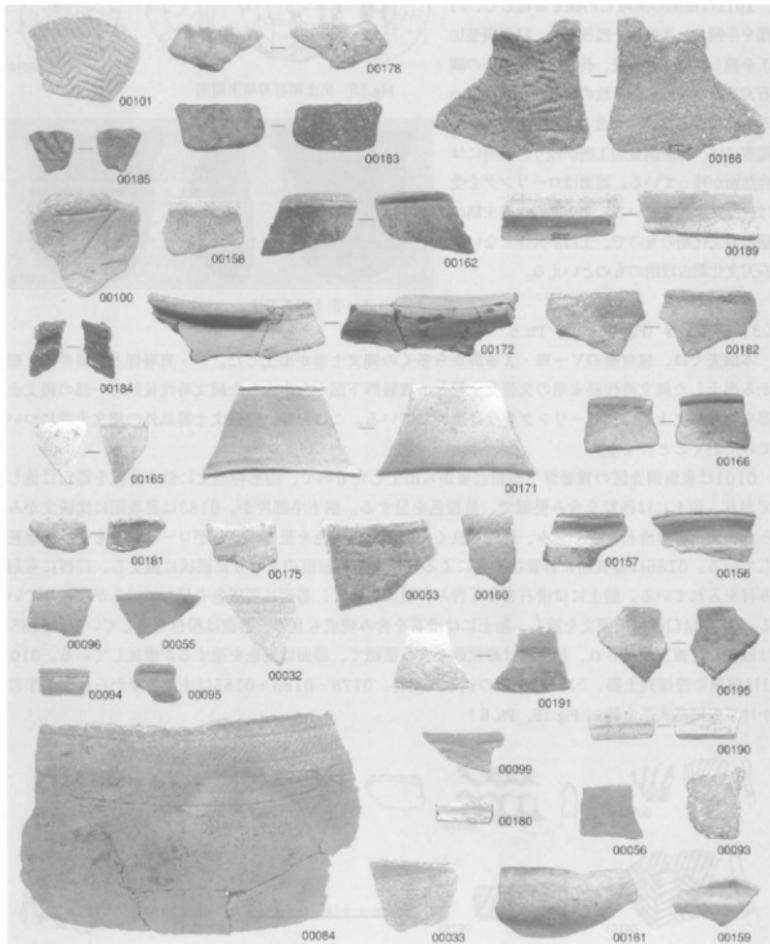


Fig.16 出土縄文土器実測図 (1)

84は埴層群下部の出土で、くびれ部にヘラ状工具による刻目を施し、膨らみをもつ胴に縄文を施した後、胴上半にX字状の交差部をもつ沈線を巡らし、X字状で区画した沈線間の一部を磨消している。胎土には砂粒・赤色粒を含み堅緻で、焼成も良く、器表面は黄褐色、内面は明褐色を呈している。胴最大径34.2cm、くびれ部径27.4cmを測る。0100は東側調査区の埴層群下部相当層から出土した。口唇に溝状、器表に曲線・直線状の沈線を施している。胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器表面は浅黄色を呈しているが摩耗している。0181は口唇に棒状工具を押しつけ施文しているが、摩耗している。0158は、肥厚した口縁端に二条の沈線を巡らしており、胎土には多量の黒雲母や赤色粒を



Ph. 6 出土縄文土器 (1)

含み堅緻で、焼成も良く、器面は橙色を呈している。0162は、直に立ち上がった口縁に二条の沈線を巡らせ、口唇近くに擬繩文が施されており、胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は黄橙色を呈している。0156は口唇をつまみ、器表はヘラ研磨を施し、口唇から内面屈曲部まではナデで仕上げている。口径12.4cmを測る。84は西平式系上器、0100は北久根山式系土器、84・0100・01・81・0184は、後期の繩文土器。93~96・99・0156~0162・0165・0166・0171・0172・0175・0180・0182・0189~0191・0195は後期後半から晩期中頃にかけての精製浅鉢（一部、鉢を含む）である。32・33は、くびれ部下に二条の沈線を巡らしているが、器面が摩耗している。西平式系土器か。53・55は後期後半から晩期の深鉢。（Fig.16・17, Ph. 6）

29は器面には横方向の条痕を施し、口唇はナデを施し、内面はヘラ状工具でナデでいる。胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成は良く、器表は褐色、内面は灰黒色を呈し、口径22.8cmを測る。35は埴輪群出土で、器表には、横・ナナメ方向の粗い条痕を施し、内面は指押さえ後、ハケ状工具でナデで仕

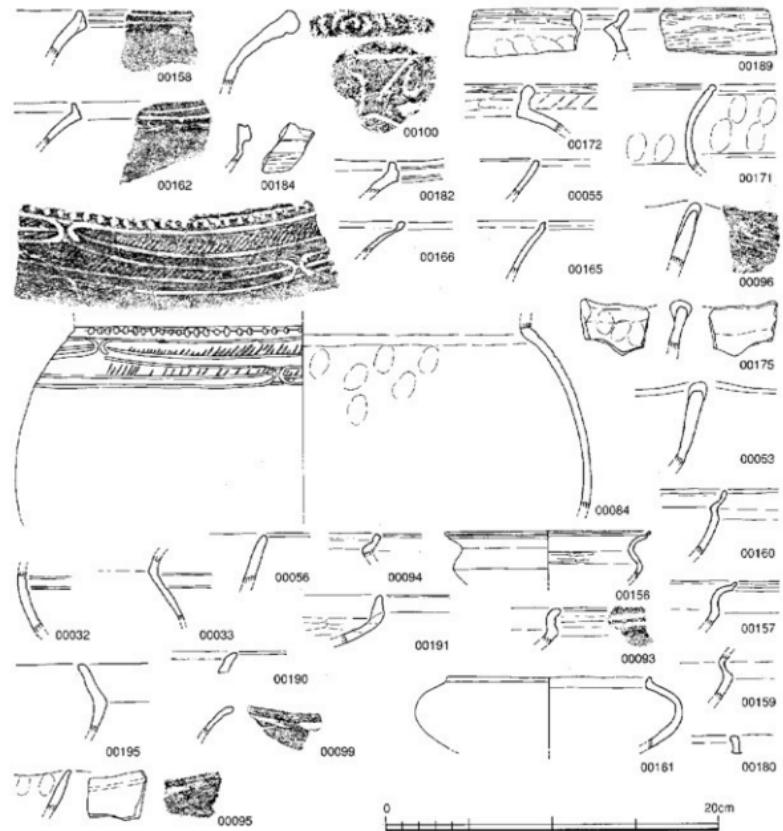
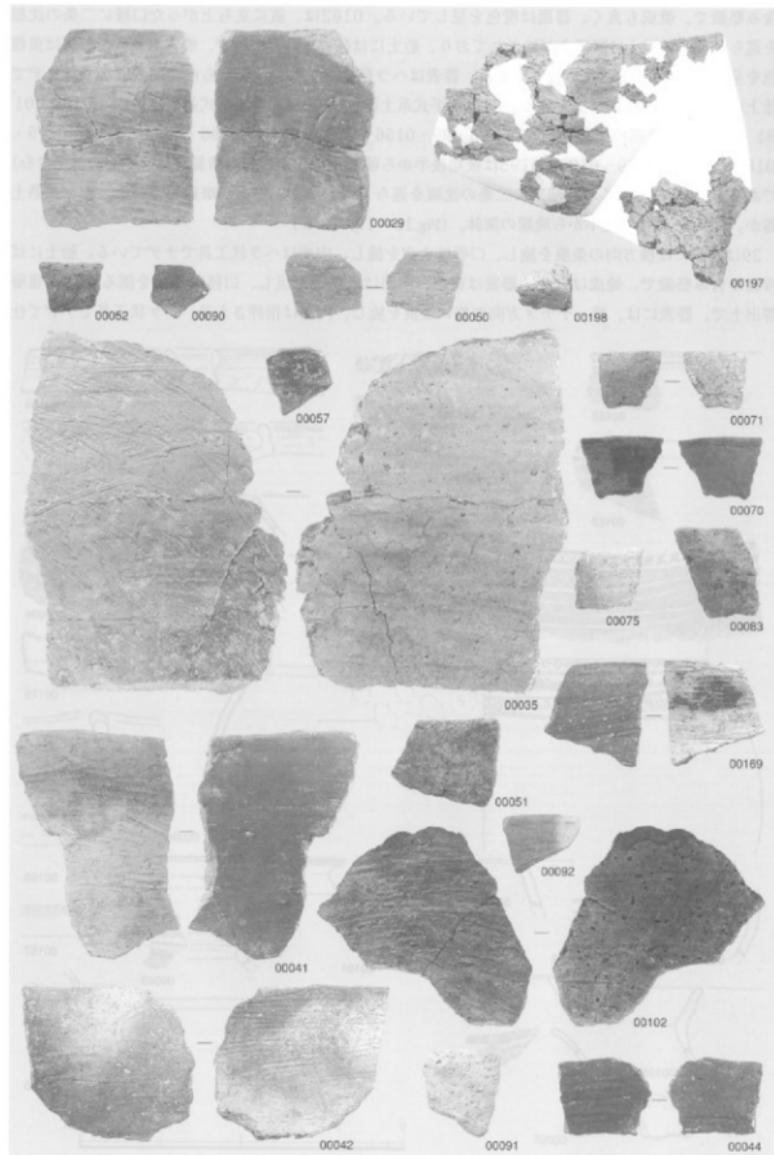


Fig.17 出土繩文土器実調図（2）



Ph. 7 出土縄文土器（2）

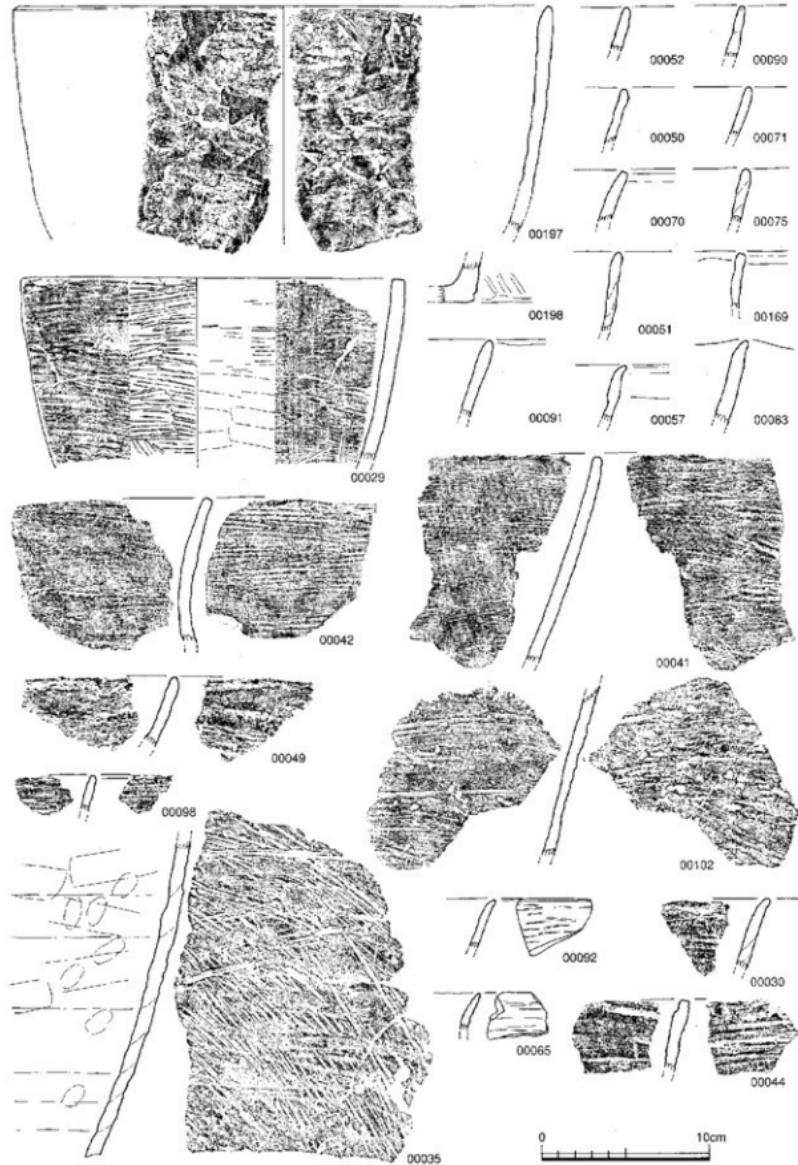


Fig.18 出土縄文土器実測図（3）

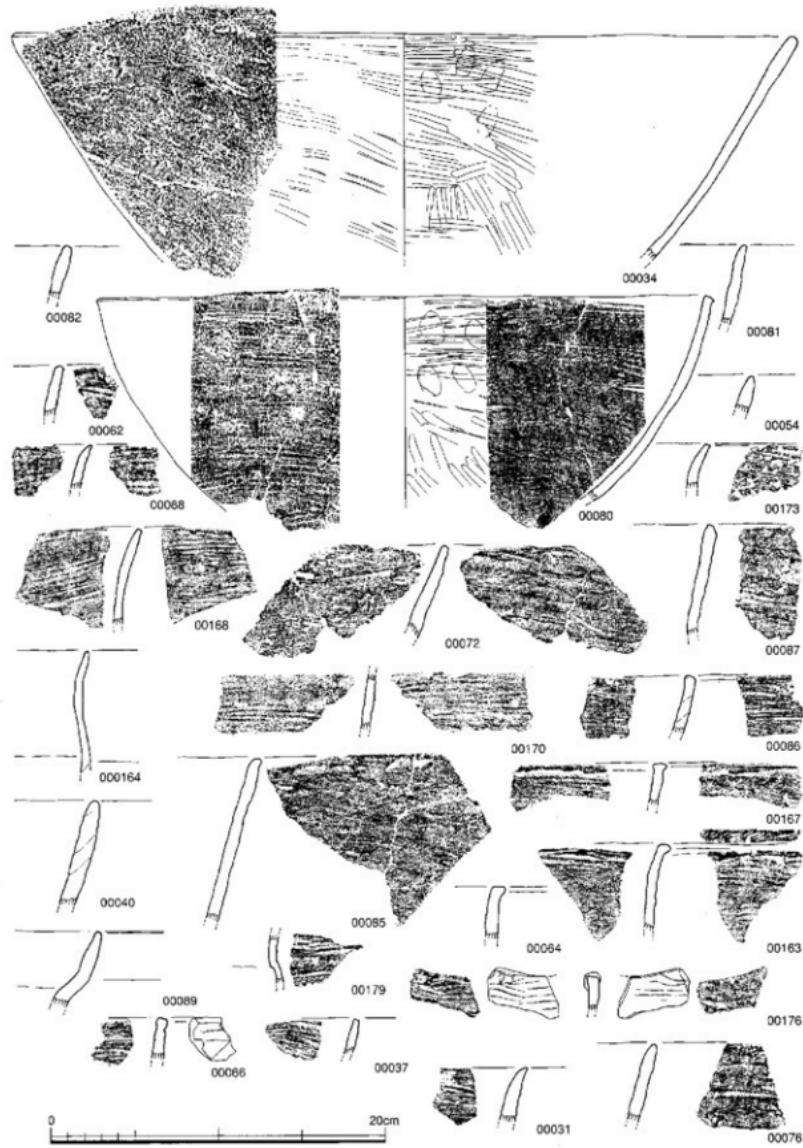
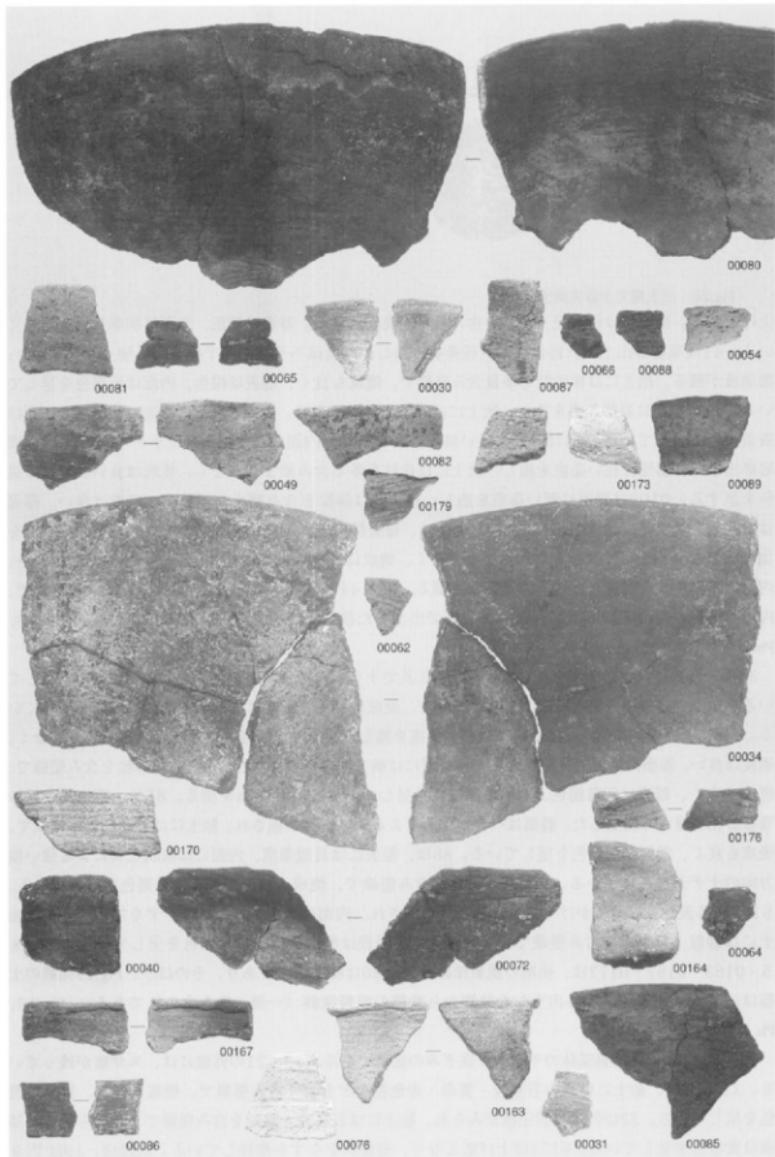


Fig.19 出土繩文土器実測図 (4)



Ph. 8 出土繩文土器（3）

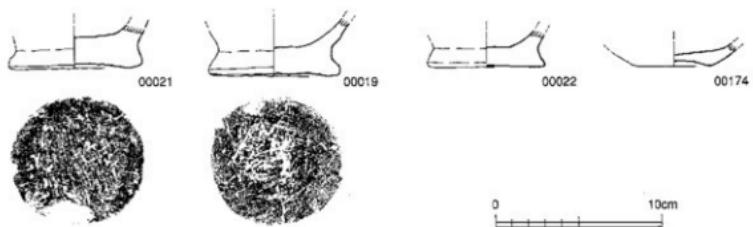


Fig.20 出土埴文土器実測図 (5)

上げている。胎土には粗砂粒・細粒を含み粗く、焼成は良い。器表は褐色、内面は明赤褐色を呈している。41は埴層群出土で、器表には貝殻条痕を施し、内面はヘラ状工具で横方向に強くナデしており、擦過痕が残る。胎土には粗砂粒を多量含み堅緻で、焼成も良く、器表は橙色、内面は灰黒色を呈している。42は器面に貝殻条痕を施し、胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器表は黄橙色、内面は灰黄褐色を呈している。44は器表に粗い貝殻条痕を施し、内面はヘラ状工具でナデしている。49は埴層群出土で、器面に粗い条痕を施し、胎土には砂粒を多く含み締まりがなく、焼成は良い、器面は橙色を呈する。0102は器面に粗い条痕を施し、胎土には砂粒を含み締まりがなく、焼成は良い。器面は黄褐色を呈する。0197・0198は同一個体で、埴層群出土。器面は横方向の条痕を施した後ナデを加えており、胎土には砂粒を含み締まりがなく、焼成は良いが器面は粗く凹凸があり、器表は黄色、内面は暗褐色～灰褐色を呈し、口径32cmを測る。35・44・49・0102・0197は、後期の粗製深鉢で、Fig.18掲載の他の土器は、V～埴・X層群で出土した後期から終末期の粗製深鉢である。(Fig.18, Ph.7・8)

34は、器表には貝殻条痕を施した後ヘラ状工具でナデ、内面は横・ナメ方向のヘラナデを施している。胎土には砂粒・黒雲母などを含み堅緻で、焼成は良く、器表は灰黒色、内面は黒色を呈している。口径47.2cmを測る。72は器面には粗い条痕を施し、胎土には粗砂・細砂粒を含み締まりがなく、焼成は良い。器面は黒灰色を呈する。80は器面には横方向の条痕を施し、胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成は良く、器表は灰黄褐色、内面は黒褐色を呈している。口径37cmを測る。85は、東側調査区の埴層群相当層から出土した。器面はヘラ状工具による強いナデが施され、胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は黒褐色を呈している。86は、器表には貝殻条痕、内面には板状工具による強い横方向のナデが施されている。胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は黒褐色を呈している。0163は器表から口唇にかけて横方向の条痕が施され、内面は条痕を施した後ナデを加えている。胎土には砂粒・黒雲母を含み堅緻で、焼成も良く、器表は橙色を内面は褐灰色を呈している。72・85・0163・0167・0173は、後期の粗製深鉢、34・80は晩期の鉢であり、そのほか、Fig.19掲載の土器は、V～埴・X層群から出土した後期から晩期の粗製深鉢（一部、鉢を含む）である。(Fig.19, Ph.7・8)

19・21・22は、粗製深鉢のやや上げ底ぎみの底部である。19・21の外底には、スサ痕が残っている。19・21は、胎土には粗い石英粒・雲母・赤色粒などを多く含み堅緻で、焼成も良く、器面は橙色を呈している。22は外底に初圧痕がみられ、胎土には石英粒・雲母を含み堅緻で、焼成も良く、器面は黄橙色を呈している。0174は上げ底となり、壺底状をなすが摩耗している。底径は、19は7.9cm、21は8cm、22は7.1cm、0174は4.5cmを測る。22は晩期、他は後期のものか。

(4) 突蒂文土器 (Fig.21~24, Ph. 9 ~ 12)

74は、台形を呈する幅広の凸帯をコ字状に整形した口縁のやや下に貼り付け、不揃いな刻目を施しており、器面には貝殻条痕が施されている。胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器表は黒色、内面は灰黒色を呈している。0109は、三角形を呈する凸帯をコ字状に整形した口縁のやや下に貼り付け、ヘラ状工具によりナメ方向からの刻目を施し、器表は強い横方向のヘラナデ、内面は指押さえ後横ナデで仕上げている。胎土には砂粒が多く含み堅緻で、焼成も良く、器面は橙色を呈している。0110も0109と同じ形態をとり、器皿はヘラ状工具による強い横ナデで仕上げている。器表は黄褐色、内面は褐灰色を呈している。0122は、コ字状に整形した口縁のやや下寄りに三角形を呈する凸帯を貼り付け、ヘラ状工具による不揃いの刻目を施し、器皿ナデで仕上げている。胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は褐灰色を呈している。0131は、コ字状に整形した口縁下に三角形を呈する凸帯を貼り付け、ヘラ状工具による細い刻目を施し、器面には貝殻条痕が施されている。胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は褐色を呈している。0144は、コ字状に整形した口縁下に三角形を呈する凸帯を貼り付け、ヘラ状工具により細い刻目を施し、器表はヘラナデ、内面は指押さえ後横ナデで仕上げている。橙色を呈している。以上と48・0116・0136・0140は、コ字状に整形した口縁のやや下に三角形・台形を呈する刻目凸帯を巡らす形態をとり、器面に貝殻条痕か強いヘラナデを施した甕である。(Fig.21)

0118は、丸みをもつ口唇下に三角凸帯を貼り付け、ヘラ状工具で浅い刻目を施し、器面はナデで仕上げている。胎土には細砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、黒褐色を呈している。0134は、丸みをもつ口唇下に三角凸帯を貼り付け、浅い刻目を施し、器表はナメ方向の条痕を施し、内面は横方向のヘラナデで仕上げている。0135は丸みをもつ口唇下に三角凸帯を貼り付け、ヘラ状工具で刻目を施し、器表はヘラナデ、内面はナデで仕上げている。0137・0139も丸みをもつ口唇下に貼り付けの三角・台形の凸帯を巡らせ、ヘラ状工具で刻目を施している。以上も甕である。(Fig.21)

0111は、コ字状に整形した口縁の口唇に台形の貼り付け凸帯を巡らし、ヘラ状工具により刻目を施し、器表は条痕、内面口縁近くは板ナデ、その下は指押さえ後ナデで仕上げている。胎土は精良堅緻で、器面は黄褐色を呈している。0120も同形態をとり、器表は横方向の条痕を施し、内面は横方向のヘラナデで仕上げている。胎土には砂粒を含み堅緻で焼成も良く、器面は黒褐色を呈している。0127は、コ字状に整形した口縁の口唇に台形凸帯を貼り付け、ヘラ状工具により規則性のある刻目を施し、器表はナデ、内面は横方向の板ナデで仕上げている。器面は黄褐色を呈している。0129は、コ字状に整形した口縁の口唇に、低い台形凸帯を貼り付け、ヘラ状工具により浅い刻目を施し、器表は条痕、内面は指押さえ後ナデで仕上げている。0130は、コ字状に整形した口縁の口唇に三角凸帯を貼り付け、棒状工具により刻目を施し、器面はナデで仕上げている。0142・0143は同一個体で、コ字状に整形した口縁の口唇に三角凸帯、口唇下6.5 cmに台形凸帯を貼り付け、ヘラ状工具により太い刻目を施し、器表凸帯間はヘラナデ、内面は指押さえ後ナデで仕上げている。0113・0126・0133も同形態をとり、以上も甕である。(Fig.21・22)

39は、丸みをもつ口唇にヘラ状工具で刻目を施し、器表は条痕、内面はナデで仕上げている。胎土には粗砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は褐色を呈している。69は丸みをもつ口唇に浅い刻目を施し、器面はナデで仕上げている。0114も39と同一形態をとる。0119は、コ字状に整形した口縁の口唇にヘラ状工具による刻目を施し、器面はナデで仕上げている。0141は、コ字状に整形した口縁の口唇に不規則な浅い刻目を施し、器面は板状工具による縱方向のナデで仕上げている。口縁下に焼成後の表裏からの穿孔がある。0148は丸みをもつ口唇にヘラ状工具による刻目を施し、器表は磨減

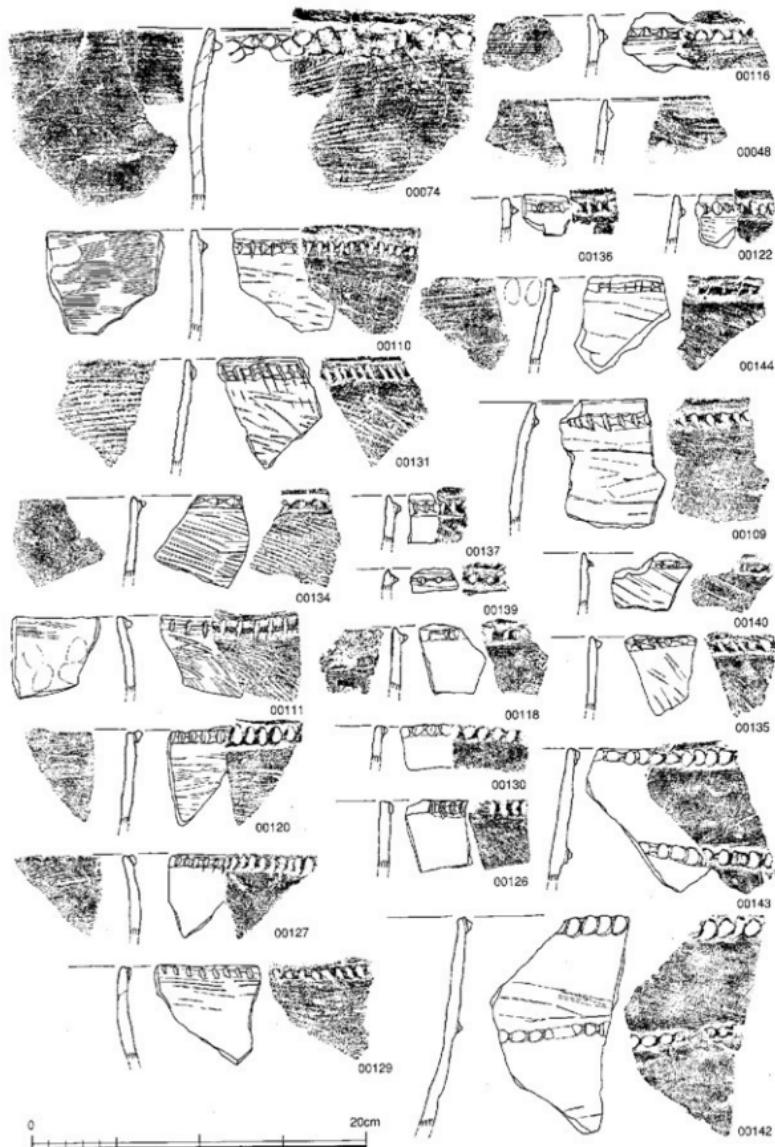
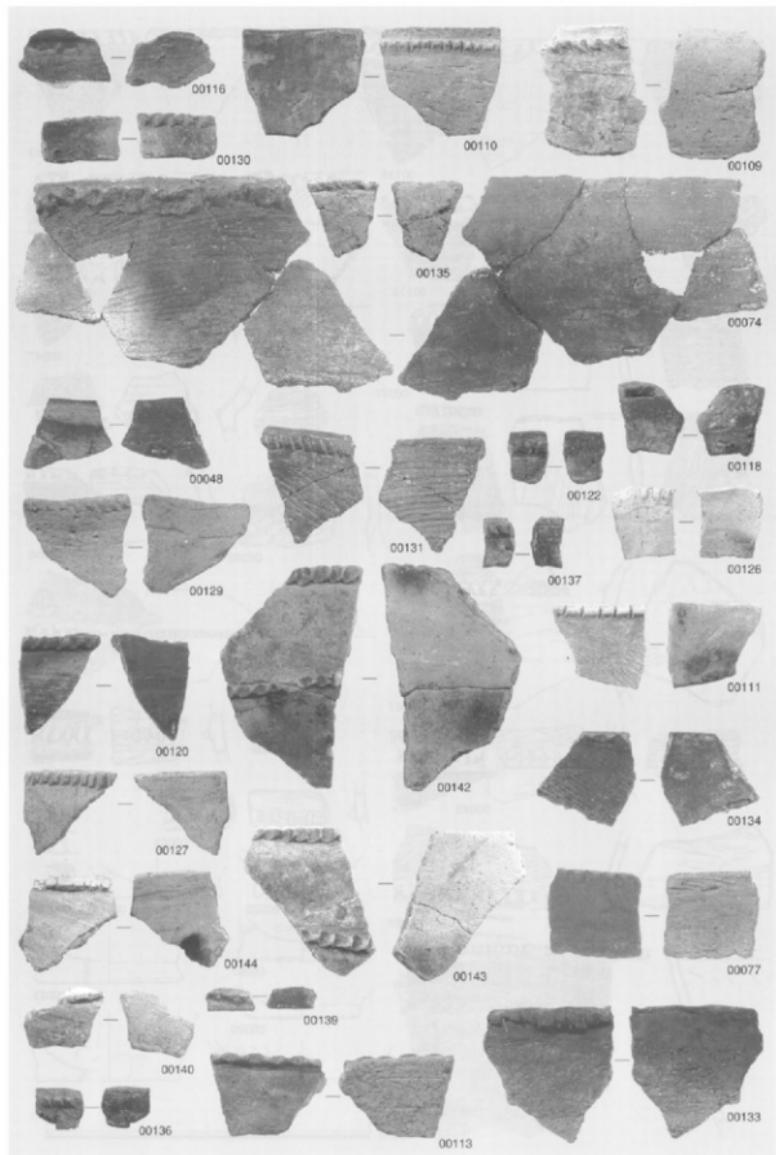


Fig.21 出土突蒂文土器実測図（1）



Ph. 9 出土突带文土器 (1)

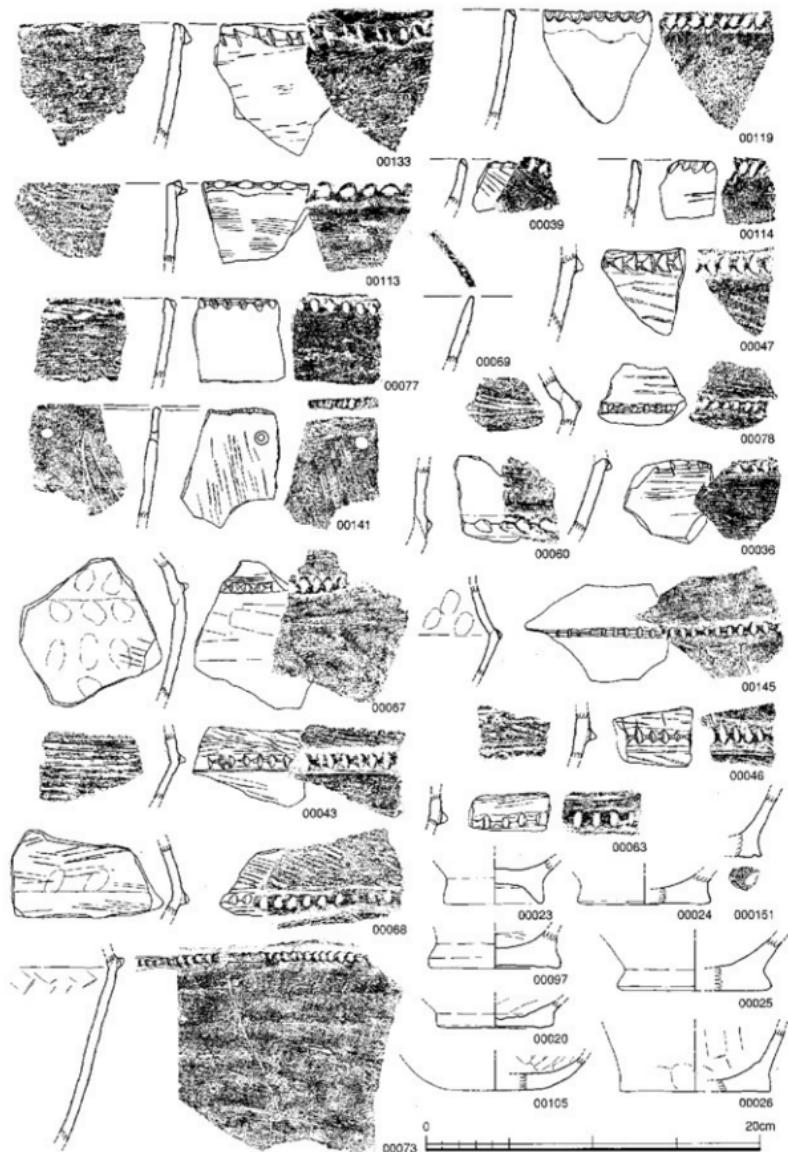
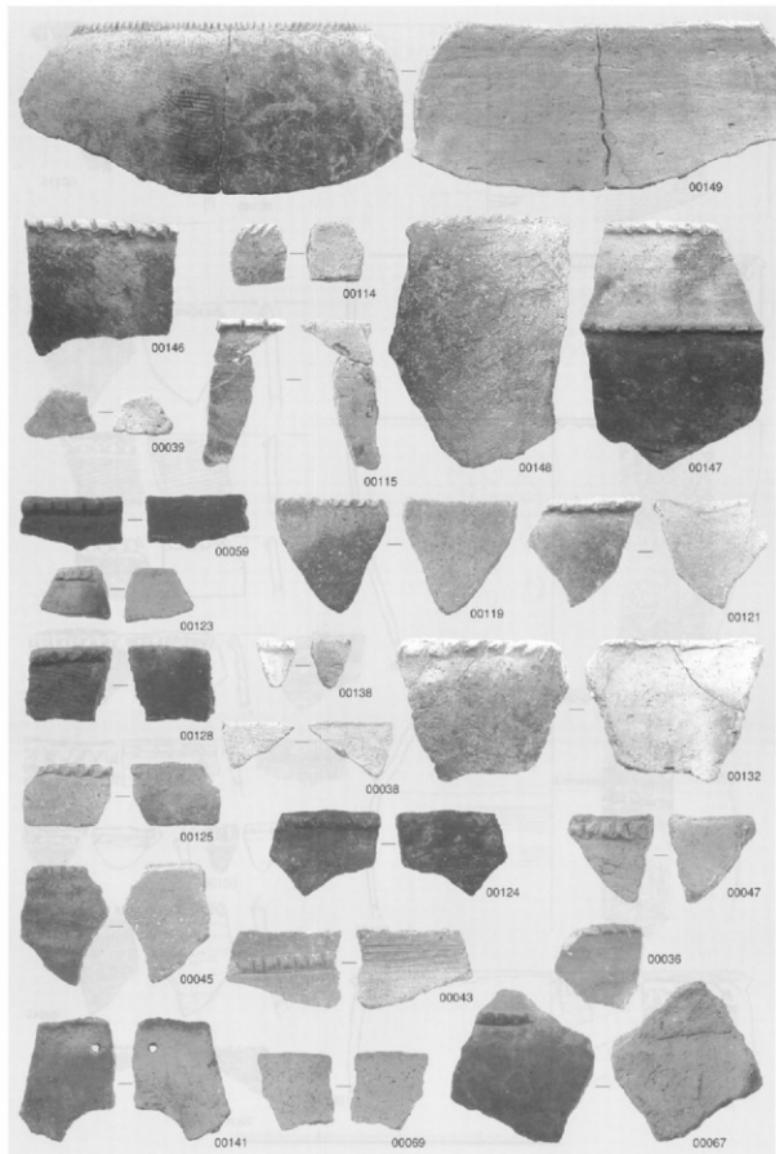


Fig.22 出土突蒂文土器実測図（2）



Ph.10 出土突带文土器 (2)

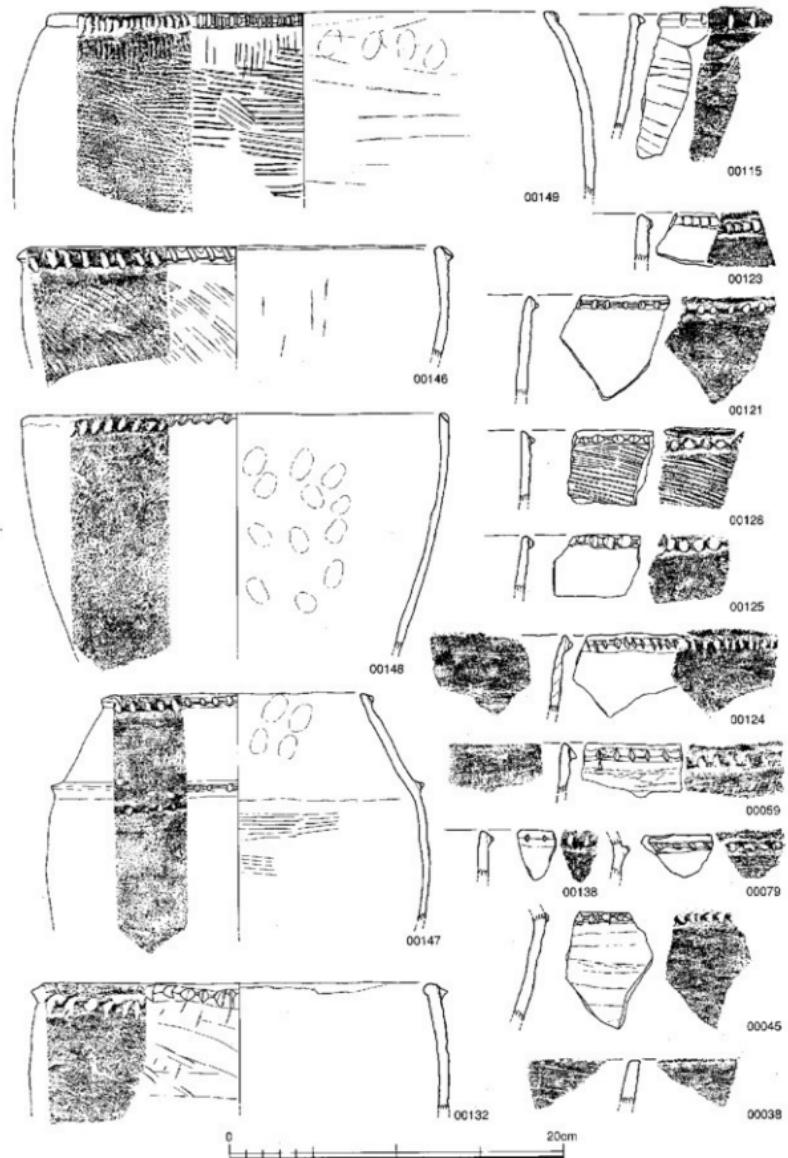


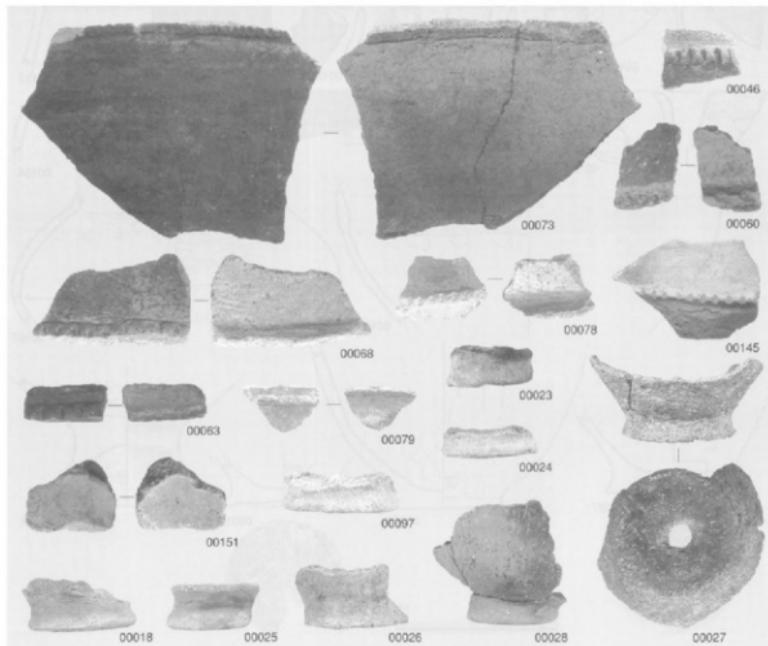
Fig.23 出土尖底文土器実測図（3）

しており、内面は指押さえ後ナデで仕上げている。胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、黄橙色～橙色を呈している。口径25.5cmを測る。77も0114と同一形態。以上も壺。(Fig.22・23)

0149は丸みをもつ口縁部の口唇に台形凸帯を貼り付け、ヘラ状工具による密な刻目を施し、器表は条痕、内面は指押さえ後ヘラ状工具による横ナデで仕上げている。胴張りの形態をもち胎土には砂粒・赤色粒を含み堅緻で、焼成も良く、器表は黄橙色、内面は橙色を呈し、口径30.4cmを測る。

0146は、コ字状に整形した口唇に台形凸帯を貼り付け、棒状工具により刻目を施し、器表はナナメ方向の条痕、内面はヘラナデで仕上げている。口径26cm。0147は、丸みをもつ口縁の口唇と口唇下5.5cmに三角凸帯を貼り付け、棒状工具による刻目を施し、器表の凸帯間はナデ、屈曲して胴張りとなる面はヘラナデ、内面の口縁から屈曲部までは指押さえ後ナデ、その下は板状工具によるナデで仕上げている。胎土には砂粒・赤色粒を含み堅緻で、焼成も良く、器面は浅黄橙色を呈している。口径16.2cm。0132は、丸みをもつ口縁の口唇に三角凸帯を貼り付け、ヘラ状工具による不揃いの刻目を施し、器表はヘラナデ、内面は指押さえ後横ナデで仕上げている。器表には煤が付着し、口径23.5cmを測る。59・0115・0121・0123～0125・0128・0138も丸みをもつ口縁の口唇に三角・台形の貼り付け凸帯を巡らし、刻目を施す形態をもち、壺である。(Fig.23)

28は平底の壺で、器表は条痕施文後、ヘラ状工具でナデ、内面は指押さえ後ナデで仕上げている。底径7.2cm。18は外底にスサ痕があり、0151は外底に軽圧痕がみられる。18・20・23～26・97・0151も壺の底部である。27は、やや上げ底ぎみの底部に焼成後、表裏から穿孔している壺である。



Ph.11 出土突帯文土器（3）

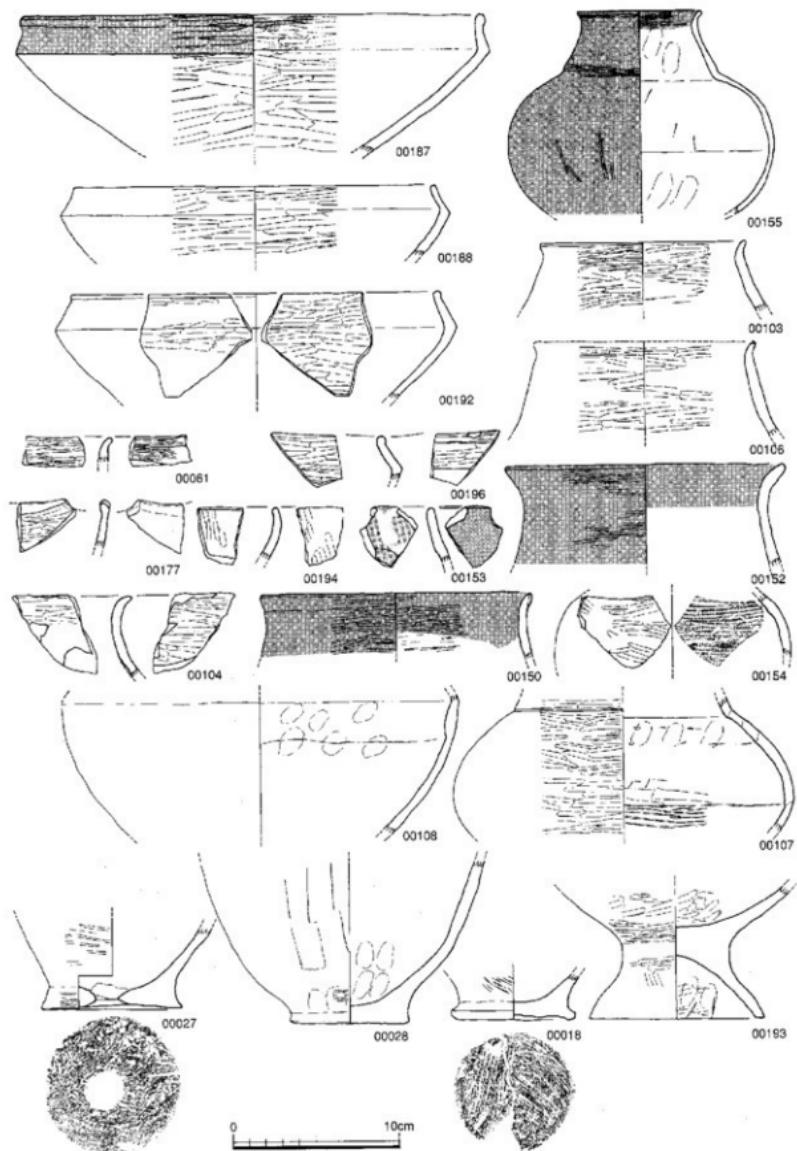
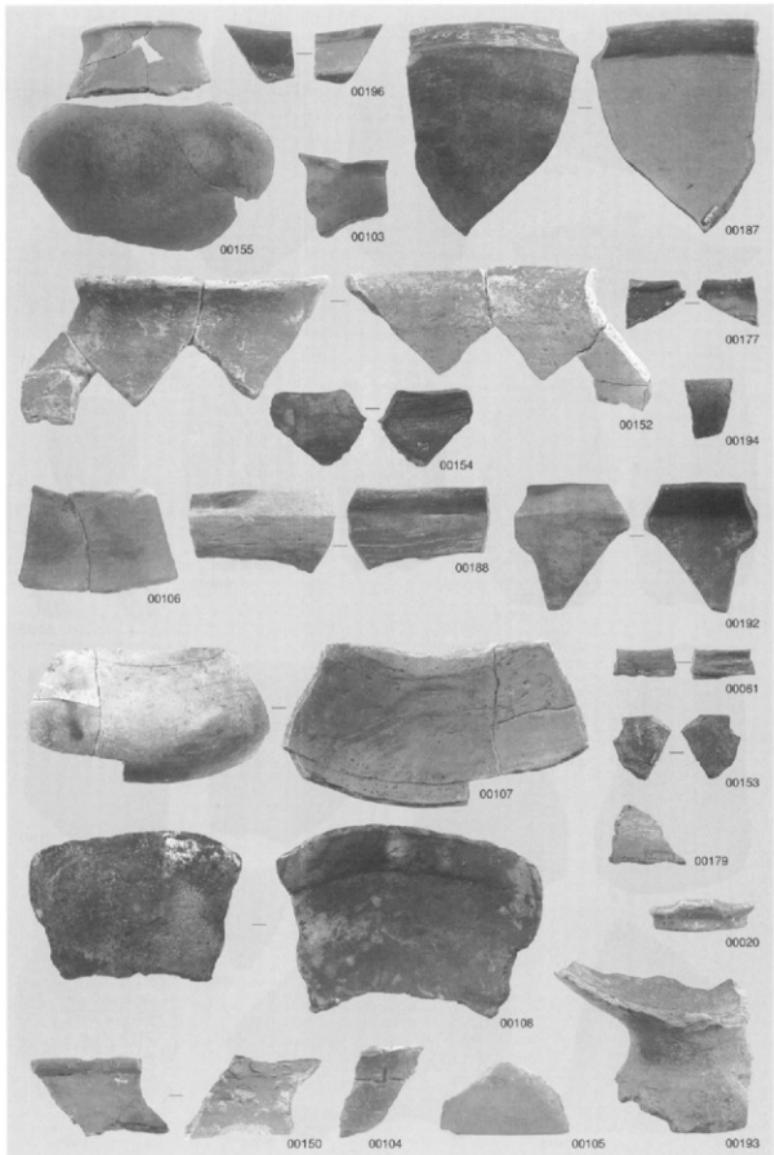
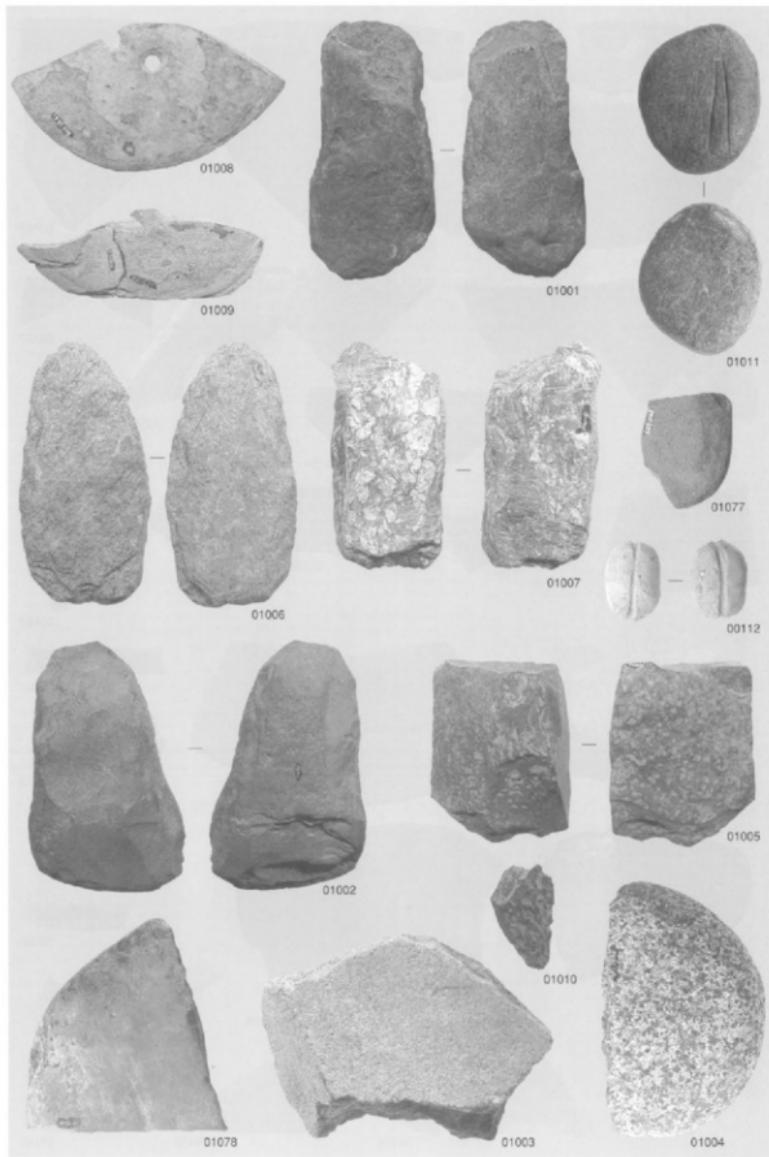


Fig.24 出土突唇文土器実測図（4）



Ph.12 出土突沿文土器 (4)



Pl.13 出土石製品および土鍤

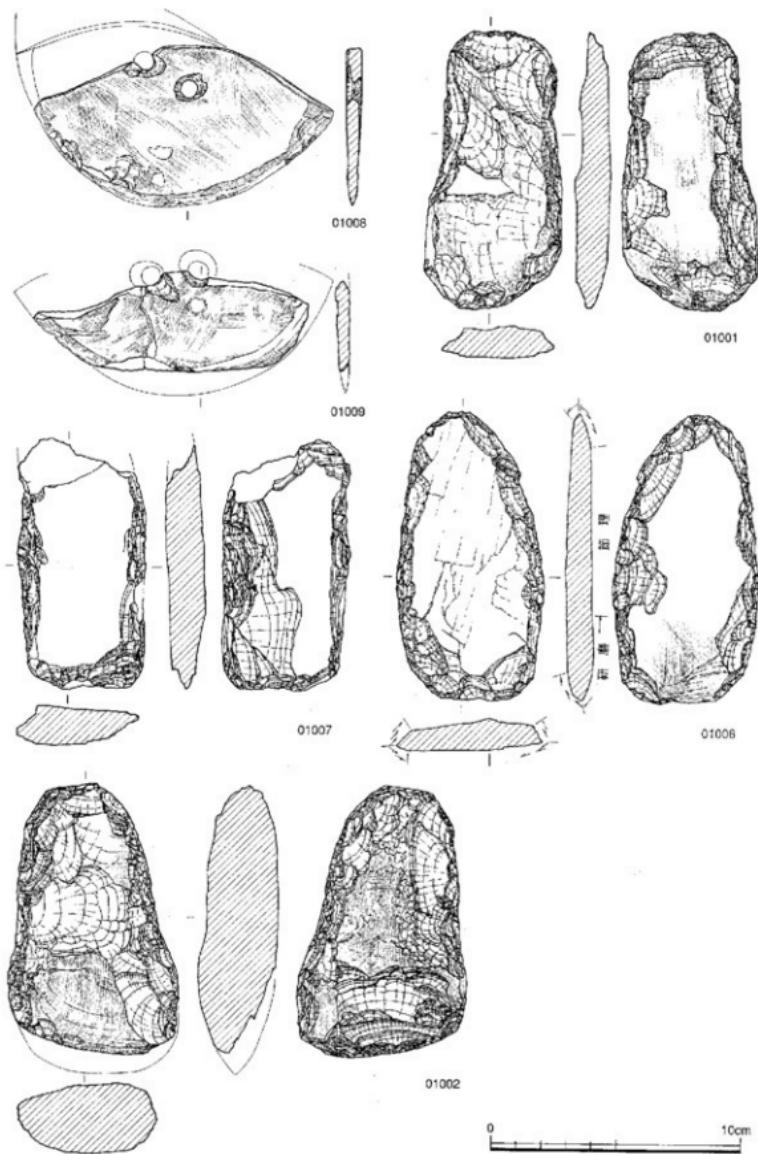


Fig.25 出土石製穂摘み具および石斧実測図

Fig.22・23掲載の突帯文土器は、0105を除いてすべて壺である。

0103は内湾ぎみに立ち上がり、口縁は外反し丸くおさめている。器面はヘラ研磨を施し、胎土は精良堅緻で、焼成も良く、器面は黒灰色を呈している。口径12.4cm。0104・0106は同一形態である。0107は球状をなす胴部片で、器表は横方向のヘラ研磨を施している。胎土は精良堅緻で、焼成も良く、器面は黄橙色を呈し、頸部に丹痕がみられる。胴最大径20.4cm。0108は大型。0150は外反する口唇を肥厚させ、器面はヘラ研磨を施している。器表は丹塗り、内面は橙色を呈し、口径16.3cmを測る。0152も0150と同形態で、口径16.8cmを測る。0154は球状をなす胴肩片で、器表はヘラ研磨が施され、丹痕が残る。彩文か。0155は球状をなす胴から屈曲し、内傾した頸をもち、口縁は外反し、口唇は丸くおさめている。器表はヘラ研磨が施され、丹塗りで、内面の口縁はヘラ研磨、頸はナデ、

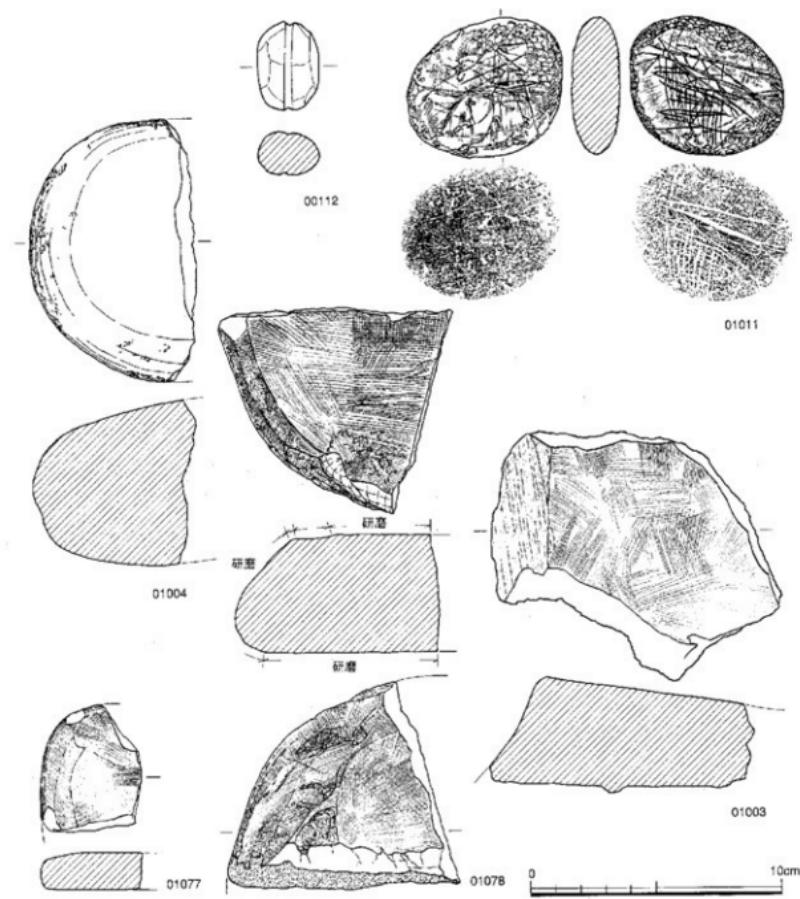


Fig.26 出土土製品および石皿等実測図

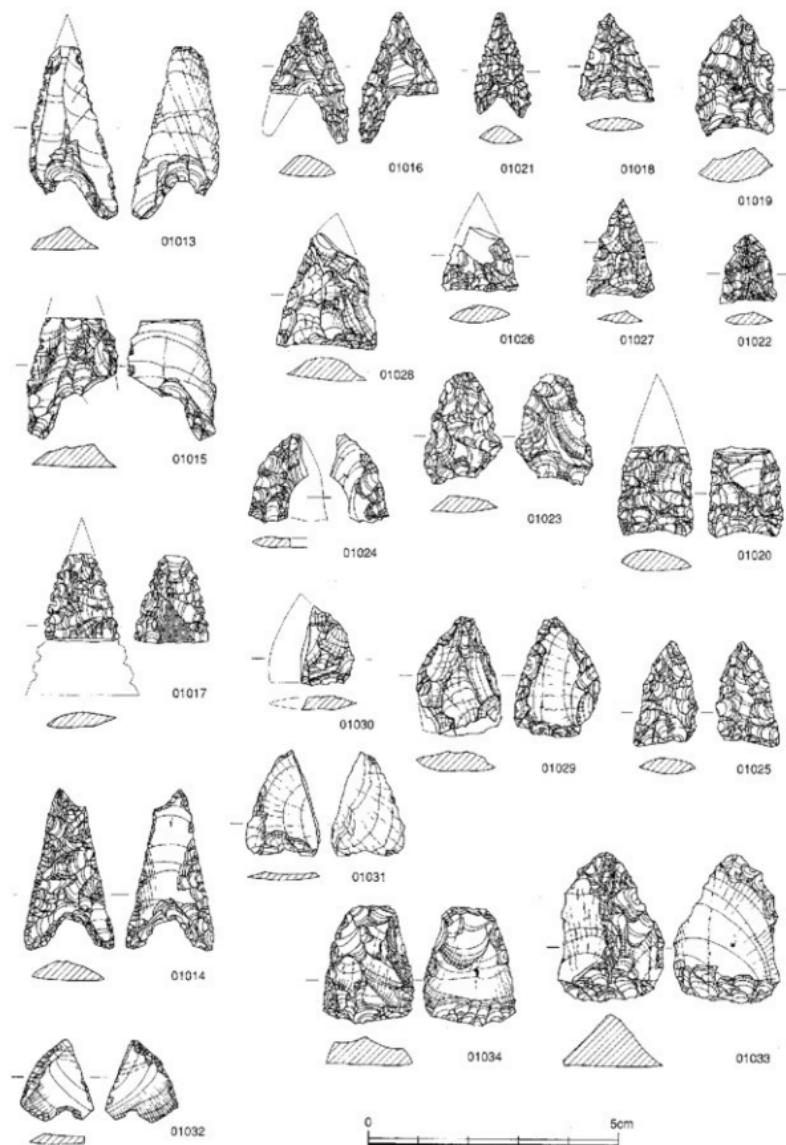
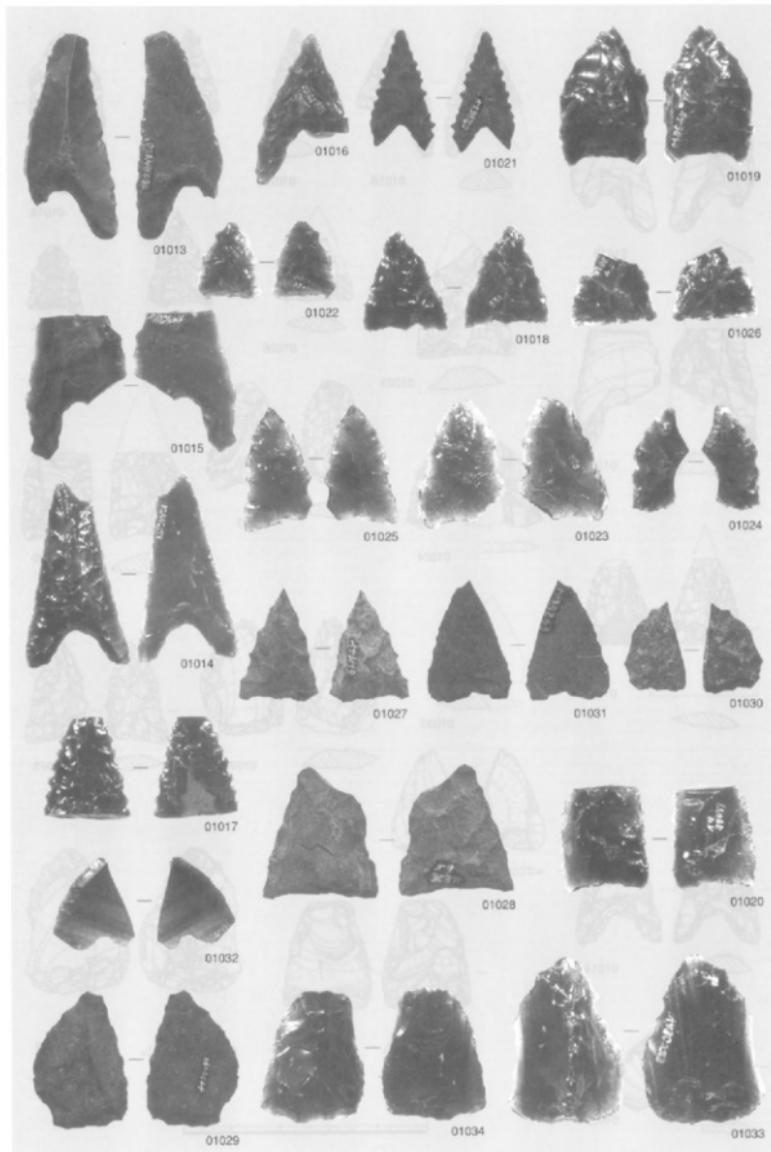


Fig.27 出土石器实测图



Ph.14 出土石器

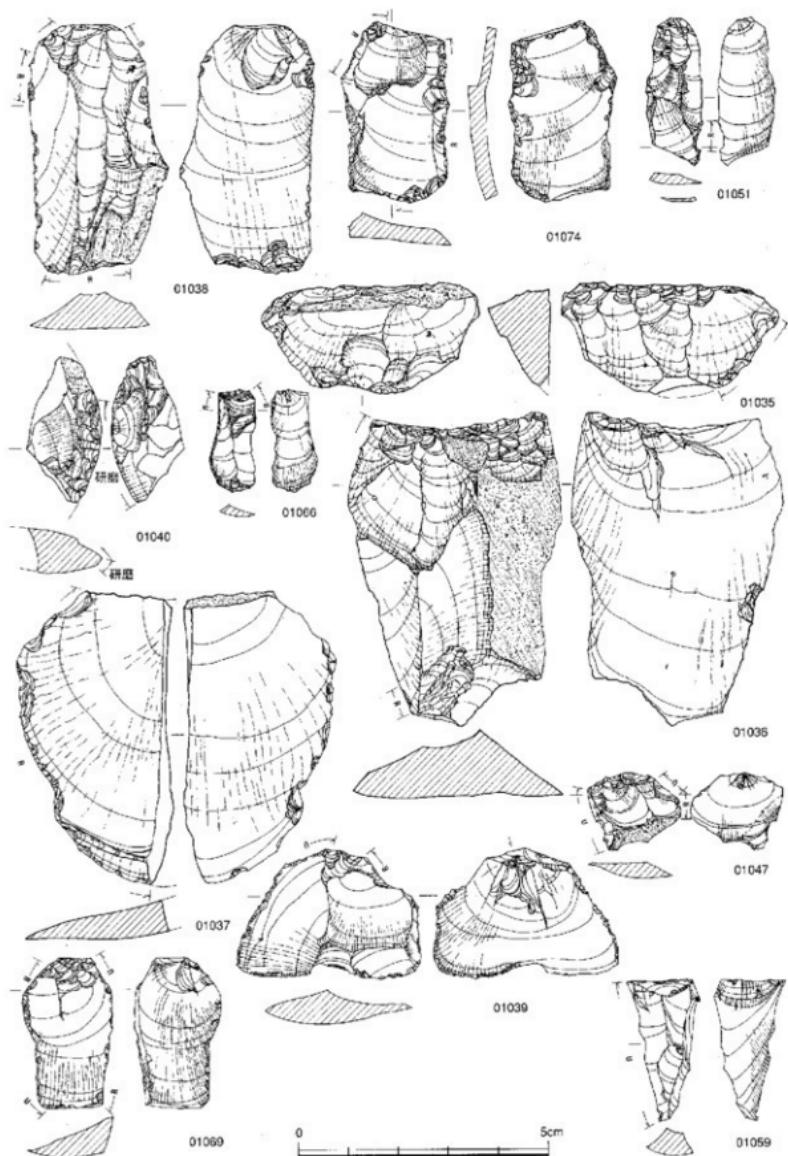
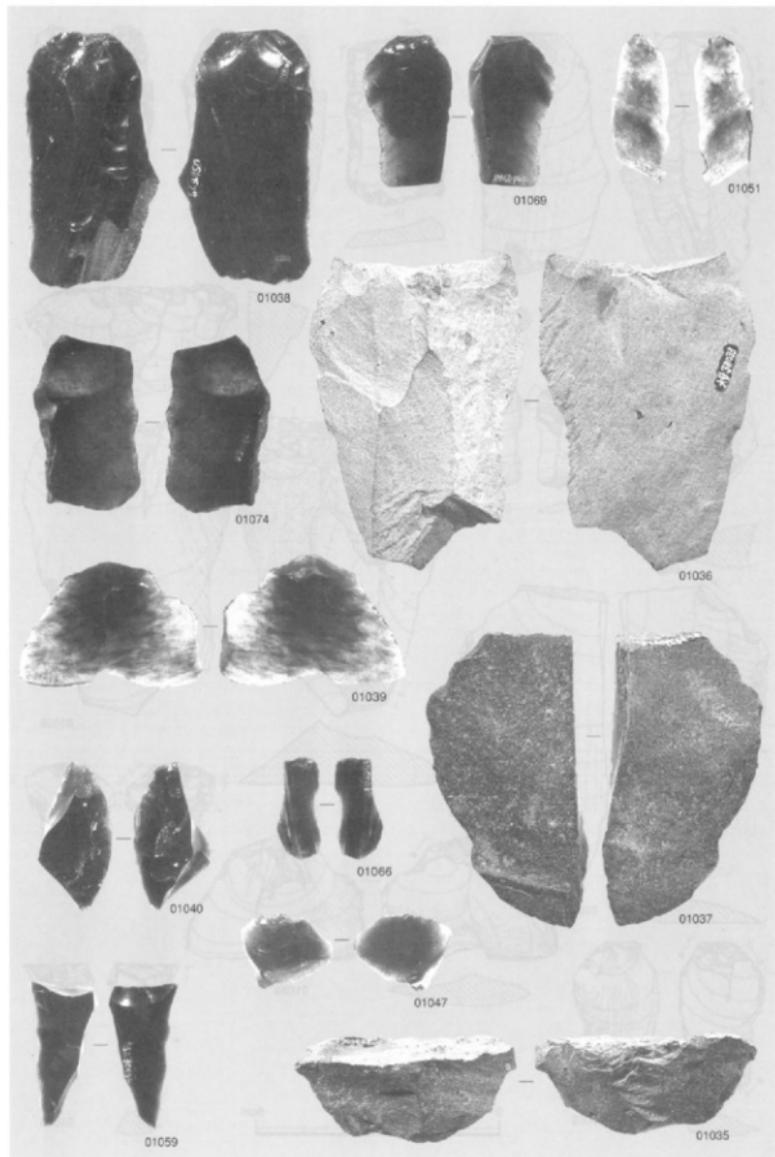


Fig.28 出土剥片石器实测图 (1)



Ph.15 出土剥片石器（1）

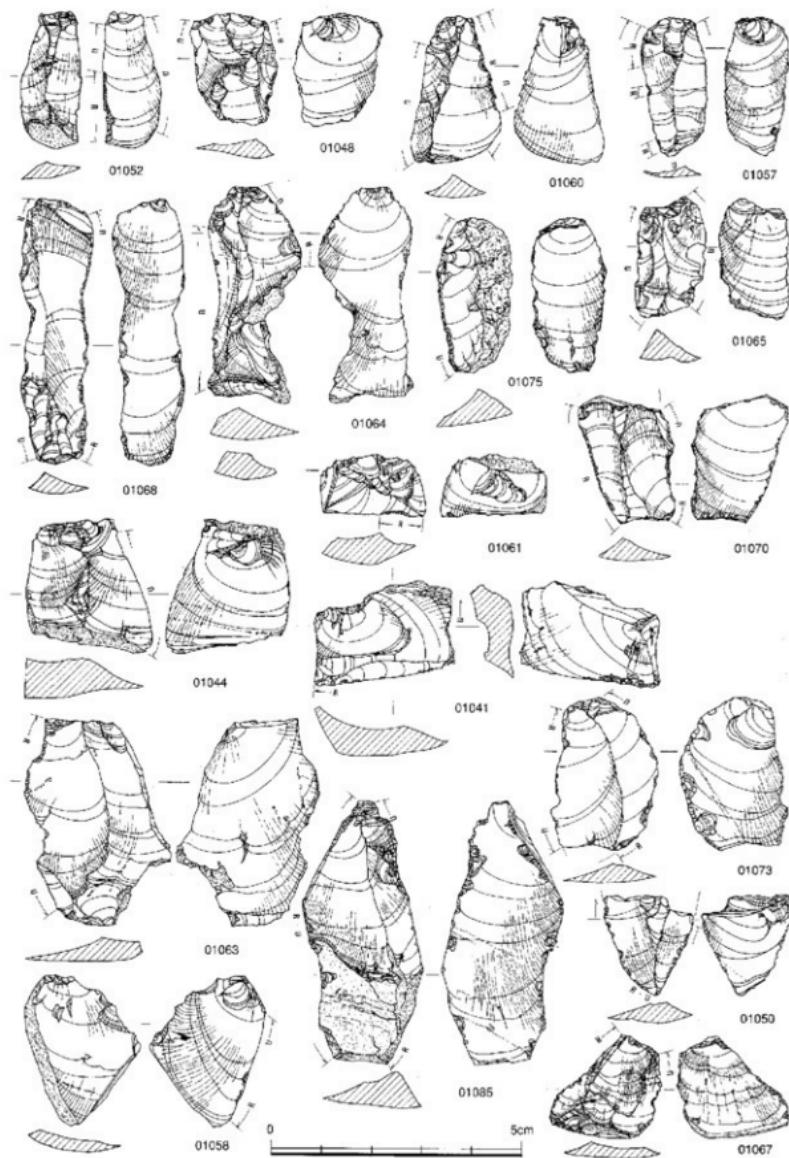


Fig.29 出土剥片石器実測図 (2)



Ph.16 出土剥片石器（2）

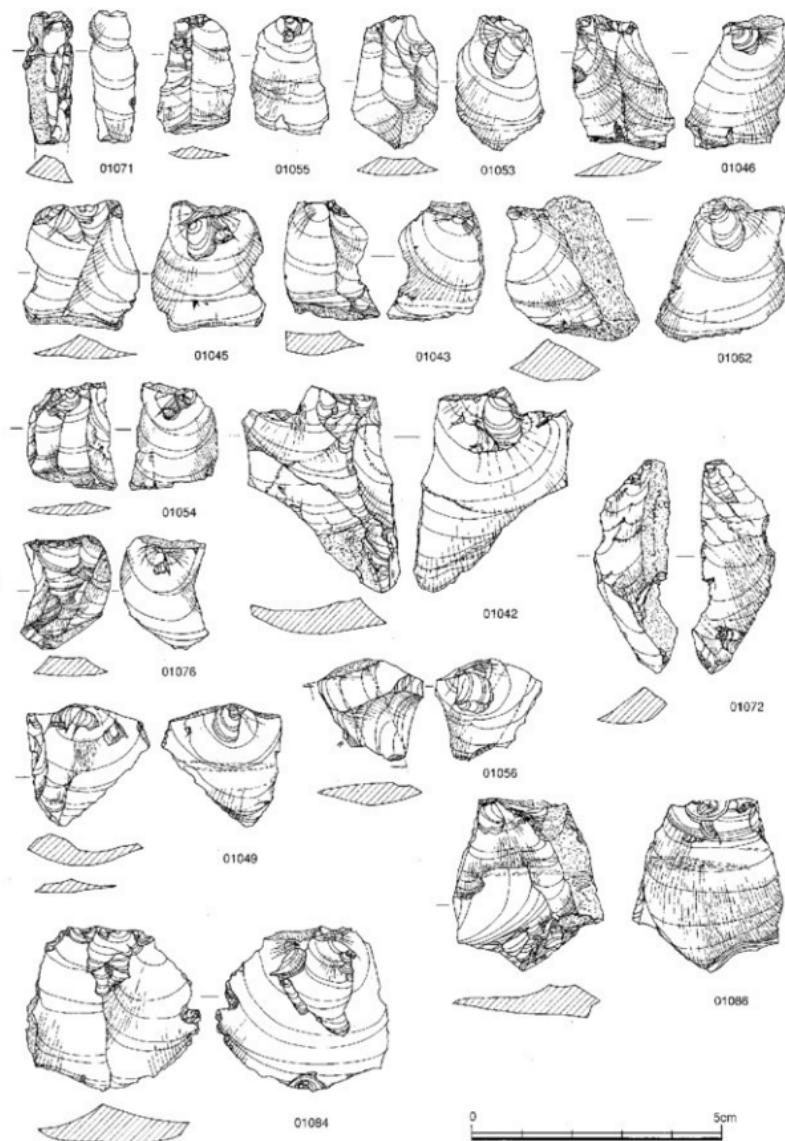


Fig.30 出土剥片実測図

胴はヘラナデで仕上げている。口径7.6cm、胴最大径は16cmを測る。以上はいずれも壺で、大型1点のほかは中型から小型である。(Fig.24)

0177は波状口縁をもち、器面はヘラ研磨が施されており、胎土には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、器表は灰黄褐色、内面は黒色を呈している。0187は皿形をなす胴から屈曲して直に短く立ち上がり、口唇は丸くおさめている。器面はヘラ研磨を施し、口唇から屈曲部にかけては丹を塗布している。胎土は精良堅緻で、焼成も良く、口径28cmを測る。0188はやや内傾ぎみに短く立ち上がる口縁をもち、器面にはヘラ研磨が施され、口径21.6cmを測る。0192も0188と同形態をもち、口径22.2cmを測る。0194はカップ状をなし、器面はヘラ研磨か。以上と61・0153・0196は鉢で、浅鉢が多い。(Fig.24)

0193は高坏で、口縁は欠失している。軸部に貼り付け刻目凸帯を巡らせていたと考えられるが、剥落している。器表および坏内面はヘラ研磨を施し、脚内面は指押さえ後ヘラナデで仕上げている。胎土には砂粒・赤色粒を含み堅緻で、焼成も良く、坏表面は黒色、内面は灰黄褐色、脚表面は橙色～灰黄褐色、内面は灰黄褐色～黒色を呈し、底径10.5cmを測る。

(5) 出土石器および土製品 (Fig.25~31, Ph.13~17)



Ph.17 出土剥片

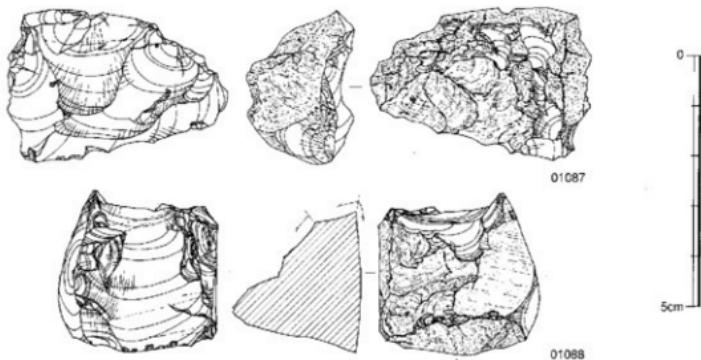


Fig.31 出土石核実測図

1008・1009は、安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石製穂摘み具である。粗削り整形後、敲打、研磨を加え、表裏から穿孔し、中心間2cmの縄綱固定孔をもち、刃は両刃に仕上げ、半月形か杏仁形を呈する。前者は背の一部が破損した後も使用したと考えられる。器長6.4cm、器幅12cm、最大厚0.6cm強、重さ60.93gを測る。いずれも突帯文土器期のもの。(Fig.25)

1001は安山岩質凝灰岩製、1006・1007は蛇文片岩製の打製石斧で、1001は、粗削り後、縁辺に剥離加工を表裏から加え短冊状に整形後、刃部および体部の一部に研磨を加えている。器長11.1cm、最大幅5.5cm、最大厚1.45cm、重さ137.52gを測る。1006は扁平礫を素材とし、縁辺に表裏から剥離加工を加え、梢円形状に整形し片面の刃部の一部に研磨を加えている。器長11.6cm、最大幅5.9cm、最大厚1.25cm、重さ128.12gを測る。1007も扁平礫を素材とし、縁辺に表裏から剥離加工を加え短冊状に整形しているが、頭部の一部が欠失している。器長10.05cm、最大幅5.1cm、最大厚1.6cm、重さ143.13gを測る。1002は安山岩(玄武岩?)を素材とし、粗削り後、剥離加工を加え撥形に整形し、体部の一部に敲打を加えた後、体部の一部と刃部に研磨を加えて蛤刃を作りだした蛤刃石斧である。刃部破損後は敲石として使用している。器長10.85cm、最大幅6.75cm、最大厚3.15cm、重さ305.69gを測る。他に蛤刃石斧片1点(1005・1010は同一個体)がある。いずれも突帯文土器期のもの。(Fig.25, Ph.13)

1011は、扁平な円盤に敲打を加え、不整梢円形に整形し、表裏に研磨を加えた後、表裏に線刻画を描いている。表は家、裏は家と樹木を表現しているか。長軸6.3cm、短軸5.1cm、最大厚1.8cm、重さ114.56gを測る。墮層群下部出上で縄文時代後期のもの。(Fig.26, Ph.13, 表紙)

1004は磨石で、縁辺には敲打痕がみられる。1077は、砂岩製の磨石(円盤?)である。1003は花崗岩製、1078は砂岩製の石皿片である。(Fig.26)

0112は墮層群下部出土で、手づくねによる砲弾形に整形し、棒状工具で組かけ用の溝を巡らせている土鍤である。胎上には砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、黄橙色を呈している。長軸3.6cm、短軸2.5cm、最大厚1.7cm、重さ17.03gを測る。縄文時代後期のもの。(Fig.26)

1013～1034は打製石鎌で、1021はハリ質安山岩製、1027～1031は古銅輝石安山岩製であり、他は黒曜石製である。1013・1015は洞片鎌、1017は有齒鎌(石鋸?)、1021は有齒鎌で、1014は大きく、1016は一部に主要剥離面が残っている。1014は器長3.25cm、最大幅1.8cm、最大厚0.35cm、重さ1.4g。1017の裏面の一部には研磨を加えている。1021は器長2.1cm、最大幅1.1cm、最大厚0.35cm、重さ0.44g。1013～1017・1021は縄文時代後期のものと考えられる。1018～1020・1022

～1025・1028・1031・1032は、平基に近い凹基部をもち、1026・1027・1030は平基の基部をもち、1029・1030・1033・1034は平基に近い凸基部をもつ。1027は、器長1.91cm、最大幅1.32cm、最大厚0.25cm、重さ0.61g。1033は器長2.1cm、最大幅2.1cm、最大厚1.13cm、重さ4.28g。1034は、器長2.37cm、最大幅1.82cm、最大厚0.55cm、重さ2.63g。1022は器長1.35cm、最大幅1.1cm強、最大厚0.25cm、重さ0.32g。1023は器長2.25cm、最大幅1.59cm、最大厚0.3cm強、重さ1.04g。1025は器長2.12cm、最大幅1.26cm、最大厚0.3cm弱、重さ0.71g。1018は器長1.7cm、最大幅1.5cm、最大厚0.25cm、重さ0.6g。1019は器長2.4cm、最大幅1.55cm、最大厚2.07g。1018～1020・1022～1034は突帯文土器のものといえる。(Fig.27)

1035～1037は古銅輝石安山岩製、1040・1074は黒曜石製の削器。1038は黒曜石製の先刃搔器で、器長5.1cm、最大幅2.76cm、最大厚0.75cmを測る。1037・1038はⅧ層群下層出土で、縄文時代後期のもの、他は突帯文土器か。他に縁辺に二次加工を加えたり、使用痕がみられる剥片石器が25点出土した。また、石核(1087・1088)や剥片(1046など)や削片も多量出土している。(Fig.28～31)

第4章　まとめ

1. 中世面の調査成果

本調査地は、那珂川東岸の低位段丘上に形成された沖積微高地（自然堤防）上に所在し、V・VI・X層群を基盤とし、中世初期（平安時代後期～同時代終末期）の集落を検出した。集落は削平を受けているが、南北溝と東西溝によって区画されたなかに、一軒ずつ配置されていたと考えられ、掘立柱建物があり、広い中庭があり、墓地も般地内に設けられた農村集落か。第5号土塚墓にみられる火葬墓については、類例の検出を待ちたい。

2. 下部包含層の調査成果

V～Ⅶ層群上部で、縄文時代終末期の突帯文土器期の溝と考えられる包含層を検出し、良好な組成をもつ資料を得た。突帯文土器は、最古形態をもつものから板付I式土器並行期のものまであり、後者の組成がもっとも揃っている。壺・鉢・浅鉢・壺・高杯がある。石器は、武器・狩猟具としての石鎧がもっとも多く、工具として伐採用の蛤刃石斧、上掘り用の打製石斧があり、溝理工具としての削器・剥片石器や磨石・敲石・石皿があり、農具として石製穂摘み具がある。本調査地の近隣に集落が所在するか。

Ⅷ層群下部では縄文時代後期の包含層を検出し、西式系土器と土錐や線刻縹・削器などが出土した。線刻縹は、家を描いていると考えられる。集落は近くに所在すると考えられる。

以上のほか、ローリングは受けているものの、縄文時代前期の曾畠式土器、同時代中期の並木式土器、同時代中期末から後期前半にかけての阿高式系土器が出土した。これらの各時期の集落は、南の中位段丘上に所在すると考えられる。

Ⅸ層群では、ローリングを受けているが、先土器時代終末期の細石刃文化期の細石刃核が出土した。その下に砂礫層が存在することを勘案すれば、Ⅸ層群はこの時期か、縄文時代草創期に形成されたと考えられる。

曰佐遺跡

—曰佐遺跡群第1次調査報告—

2000年（平成12年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 丁目8番1号

印 刷 横ドミックスコーポレーション
福岡市博多区博多駅南六丁目6番1号

